

【完結】 連盟軍最強の魔法少女《わたし》にアイドルになれって

きゅべレイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

言われても無理だと思うんですけど

え………？ マジ………？

目次

パパ志望おじさん	1
デート的ななにか	22
最終決戦	40

パパ志望おじさん

「僕の話はパパとでも思ってもらってくれ」

初対面の男性にそう言われるキモさがわかるでしょうか。

年齢は二十代後半から三十代前半といったところ。

黒縁のメガネに散切り頭。背は高く、それでいてがっしりとした体躯。

柔らかな笑みを浮かべた温厚そうな人です。

着ている白い軍服は、彼が連盟所属の軍人であることを示していました。

好みの程度であれば六十五点といったところでしょう。悪くはありません。

ですが、私は十二歳の魔法少女です。

そんな相手に突然パパと思ってくれなどという男、キモいですよね。

彼が不審者であれば、私のリリカルマジカルアンチマテリアルライフルで一発なのですが、先んじて身分証を見せられしまいました。

パスカル・テルミドル。階級は中尉。

この連盟において十二氏族の一つに数えられるテルミドル家の嫡男だそうです。

十二氏族というのは連盟に連なる小国の一つをかつて支配していた、いわゆる王族。

テルミドル家はその一家ということですね。ちなみに連盟というのは複数の小国がまとまった作られた一大国家となっております。

流石にそんな男相手に突然発砲しては、軍法会議は免れません。

私はベンチから立ち上がると、中尉に身分証を返却しました。

ワンピース型につくられた魔法少女用の軍服――。

その裾を掴んで、仰々しく礼をします。

「シアン・ウエルテクスと申します。階級は曹長。以後、お見知りおきを」

中尉はへにやりと笑って、わたわたと手を動かしています。

「ああ、僕は……、身分証は今見せたね。パスカルと呼んでくれ」

「了解しました中尉」

「拒絶の意思を感じるね。まあいいや」

「では中尉とお呼びします」

「えくくつと、僕がどうしてここにキミを迎えに来たか分かるかな？」

「ふむむ……」

「ここは連盟中央にある首都イグニス——。その中央区に位置する軍事局のロビーです。

ベンチが並べられ、受付が来客を次々とさばいています。人通りはそれなりのもの。

私達の邂逅もそんな風景の一部に過ぎず、別段目立った様子はありません。

何故私がおんなとところにいるのか。当然自分のことですから、理解しています。

「今日ようやく独房から出されたからですね」

「自分が何をしたかわかっているのかい？」

「先の大戦において魔法少女として従軍しておりました」

先の大戦——第二次魔法少女大戦。

魔法少女を使った複数国家間の戦争です。

おそらく私が戦っていたのが、最前線でしょう。

「しかしそれでなぜ一年間も独房送りに？」

「全ての操縦者がキミを恐れたからだよ。何故だと思う？」

魔法少女というのはその力を失う二十歳まで人権を認められておりません。

魔力という強大な力を有するからです。

あくまで兵器としての運用を求められ、兵器であるからには当然操縦者を必要とする。

呼び名は監督役、ご主人さま、リーダー、先生、師匠、上司——。

まあ、なんでもいいですが……。

魔法少女は操縦者がいなければ、あらゆる自由が認められないわけ

です。

そして私にはいままで正式な操縦者ドライバーがいませんでした。なぜならば――。

「私が一撃で都市を吹き飛ばすほどの魔法少女だからでしょう」

「正解。もし君が気分を害せば都市一つ吹き飛ばわけだ。責任重大だね」

「そんなことしませんよ。都市一つ消し飛ばせたって、国を相手には出来ません」

ふうん、と小馬鹿にするように溜め息をついて中尉は肩をすくめました。

ちよつとむかつかますね。

「君の殺処分の話も出ていた。食事に毒を盛ってね」

「それはそれはご丁寧にどうも」

「だから僕が引き取ろうってわけ」

「で、どんな度し難い性癖を持ってるんですか？」

話には聞いていました。魔法少女を無理やり手籠めにするような操縦者ドライバーがいると。

命と貞操なら命をとる人間が多いでしょう。

数多の操縦者ドライバーが危険視するような私をわざわざ引き取るということとは、相応度し難い性癖を持つているに違いありません。

それを私で試すつもりなのでしょう。

ですが私は命よりも貞操をとる。惨めな飼い犬より誇り高い鷹を選びます。

なにかしてくるようなら速攻消し炭にしてやる。

ガルルルル、という私の心の唸り声が聞こえたのか、中尉は頬をポリポリとかいて気まずそうにはにかみました。

「まいったなあ……。警戒されてるや」

「当然です」

「目的をはっきりさせておこうかな。僕は魔法少女広報課の課長なんだ」

魔法少女広報課。聞いたことがありません。おそらく新しい課な

のでしょうか。

本来は課長など中尉レベルがやる職務ではないでしょうし、彼のために作られた課だというのなら納得です。しかし、そんな課を作ってまで何がしたいのでしょうか。

「連盟最強の称号をほしいままにしているキミを魔法少女の広報に使いたいんだ」

「……………つまり?」

「アイドルになってほしいってことさ」

「はあ?」

魔法少女は兵器。敵を殺す殺戮の道具。

そんなものを広報して何になるというのか。一種のプロパガンダなのでしょいか。

「魔法少女の本質は光だと思わないか?」

「はあ?」

なんででしょう。この人、まるで意味がわかりません。やっぱり変な人なのかな。

「今、魔法少女がどういう扱いを受けているか知ってるかい?」

「一切の人権を剥奪され、二十歳まで従軍することになります」

「うん。大半は死亡するか、あるいは二十歳を超えると魔力を失うため、不要とされて軍を除隊させられる。もちろん上手くやって残る子もいるけどね。で、その後は?」

その後――、軍に残った元魔法少女がどうなるか、ということでしょうか。

「私の上官も元魔法少女でしたが?」

「そう、あの人は立派に軍人をしていました。」

「けっして軍に残ることが暗い未来だということはないはずです。」

「いや除隊させられた方」

「市井でのびのび暮らしてるんじゃないですか?」

「まさか! 民衆は魔法少女達をいまや完全に殺戮の道具と認識しているのさ。その偏見は彼女らを結婚や就職から引き離し、ろくな社会復帰もままならない。戦闘による重度のトラウマを抱え続ける者

だって少なくない」

「つまり？」

「生き地獄ってことさ」

「はあ」

それは大変——と感じはしましたが、それだけです。

そもそも二十歳まで生き延びられると思っていなかったから、実はあんまり興味ないですね。

でも生き残ってしまった以上、考えないといけないのでしょうか。

面倒くさいなという表情で中尉を見つめていると——。

「ジューズでも飲もうか」

——と自動販売機の前まで連れて行かれました。

とりあえず私はココアを、中尉は微糖のコーヒーを購入することに。

ガコン、と缶が二本落ちてきました。

ベンチに座って、ココアをグビグビと飲みます。甘い。

しばらくすると再び中尉が話し始めました。

「キミに拒否権はないが、モチベーションシヨンは高いほうがいい。キミにはアイドルになって、現在ある魔法少女のイメージを払拭していったほしいんだ」

「嫌ですが」

「僕がプロデューサーになる」

「拒否権がほしいんですが」

「そんなものはない」

「……………はあ」

戦場の最前線を飛ぶお仕事が終わったと思えば、今度は客寄せパンダですか。

別にやりたいことがあるわけではありません。

再び戦場に赴けと言われるよりはマシかもしれませんが……、問題があります。

「中尉。私歌ったことも踊ったこともありません」

「僕が教える」

「中尉はよく踊るんですか？」

「いつも踊ってるさ。おえらいさんの掌の上でね」

「よくもまあ、ペラペラと歌いますね」

「向いてるだろう？ アイドル」

びしり、と何かしらのポーズを決めて、天井に指差す中尉。

変な人だということとはしつかりと伝わってきました。

面接は合格です。ぜひとも帰ってもらいたい。

まあ……、度し難い変態に飼われるよりはマシかな。前向きにいきましょう。

「魔法少女の本質は光、というのはどういうことですか？」

「僕の幼馴染がよく言っていた言葉でね。魔法少女は人々に希望をもたらす存在——光だとき。僕はそれを信じている」

「意味がわからないです」

「だってキミたちは可愛いだろう？ そういうことだ」

「ますます意味がわからないです」

「キミにもいずれわかる時が来る」

「幼馴染は魔法少女だったんですか？ 彼女のが好きだった——とか」

「よくわかったね」

中尉が首元からロケットを取り出しました。

それを開くと、そこには写真が入っていました。映っているのは二人。

幼い中尉——、幼少からメガネを掛けているようですね。

赤髪の少女——、肩まで伸びた癖っ毛のある赤髪などは私に似てますね。

私はこのような笑顔の似合う明るい少女でなく、もうちよいクールな感じですが。

体つきも私とよく似ています。

もともと私は年齢として平均的な体躯だと自負していますので、同年齢ならば大体似たような体躯でしょうけど。

ともあれ、そんな二人がにこやかに肩を組んだ写真が入っています

た。

「リリカ・プレガーレ。十二年前に起きた第一次大戦で戦死した僕の幼馴染さ。彼女は魔法少女が世界に光をもたらすと信じていた。けっして人殺しの道具なんかじゃないとね」

「素敵なことです」

「キミにはそれを証明してもらいたい」

「無理です」

「僕がプロデューサーになる」

「自分の可能性を信じすぎでは？」

「キミの可能性を信じてるんだよ」

なんなの、この人……。意味がわからない。

前線を飛んでいる方がマシとすら思えてきました。

私を幼馴染の代替物かなんかと勘違いしてるんじゃないのかな。

「というわけで、さっそく広報課としての任務だ」

「……と言いますと？」

「僕達はこれから南方にあるオベイロンに向かう」

「オベイロン、知っています。エネルギーである魔鉱石がよく採れることから採掘場として発展していき、今では有り余った金で絶大な観光都市と化しているそうですね。現在では軍の兵器開発も地下で秘密裏に行われているとかいないとか」

魔鉱石とは魔力を有するエネルギー源です。

この世のすべての機械は魔力で稼働し、かつては魔法少女を燃料代わりにしていたそうです。

そんな問題を解決したのが昔から魔法の石として知られていた魔鉱石。

オベイロンはその採掘場——というわけですね。

「秘密裏の情報をなんでキミが知ってるのかな？」

「公然の秘密って知ってます？」

実のところは、私の上司から聞いただけですが。ペラペラとよく喋る上司でした。

あまり機密情報は漏らさんでいただきたい。

「……とにかくそのオベイロンで名のあるVIP達によるパーティーが開かれるんだ」

「そこで広報活動、というわけですか」

「ああ、歌ったり、踊ったり、VIP達と気さくに話してもらおう」

「すべて苦手分野です。やったことがありますので」

「だろうね。でもこれから覚えてもらおうよ」

「……………命令とあらば」

内心嫌だなど思いつつも、さすがに殺処分されるのはちよつと嫌ですし。

独房暮らしが楽しかったわけでもありません。ですので……。

とりあえず言うことを聞いてみることにしました。



「この世でもっとも無駄なものは飛行機だと思います」

「そりゃあキミにとつてはね。でも僕達は飛べないからさ」

「脆弱ですね」

私達は今、空を飛ぶ飛行機の中にいました。

軍用ではなく一般用のありふれたもの。当然一般客も大量に乗っています。

クラスはエコノミー。向かう先は——オベイロン。

私の席は窓が見える右端で、中尉はその隣……といった感じ。

今は軍服ではなくオーバーオールスカート。中尉は白いスーツを着ています。

軍人だと周囲に示して怖がらせないようにするためです。

「ははは、でも従軍時に乗ったことぐらいあるだろう?」

「ええ、魔力節約のために」

「だったらおとなしく乗っているんだね。あ、そうだ。昼食は何にする?」

「何があるんですか?」

やってきたキャビンアテンダントさんからメニューをもらい、中尉がそれを読み始めます。

しかしすぐにそれを閉じ、自慢げにこう答えました。

「ビーフか、チキンだね」

「では中尉と同じものを」

「お、嬉しいね。どうして？」

「別のものを食べるより、毒が入ってる確率が少ないでしょう？」

「……………ははは。ゲームでもするかい？」

先日、私の日用品を中尉とともに購入しました。

ろくに関わったこなかった娯楽用品などもです。軍の規定ではなるべく与えないようになっていっているのですが。

妙な思想に目覚められたら困りますからね。

とはいえ、私は与えられる側。貰えるならばやるだけの話。

頂いたのは戦略的な要素の大きいストラテジーゲームでした。

ゲームハードは長方形の携帯機。テレビに繋がったり、折り畳めたりできるのが便利です。

ふふ…………。自分の軍を成長させ、敵軍を蹂躪していくのはたぎりますね。

「楽しいかい？」

「ええ、なかなか興味深いです。他のジャンルもやってみたいですね。もちろんこのソフトをやり込んでからですが…………。中尉は何をなさっておられるんですか？」

「魔法少女はニュースを見ないのかい？」

中尉はどうやらカードのような携帯端末で、世間のニュースを確認しているようです。

「あまり見せられたことはありませんね」

「だろうね。世間事情に詳しい魔法少女というのは扱いにくいものだから」

だから社会のことなど教えないのが操縦者の定石——と中尉は言います。

「そういう感性が、彼女達をダメにしていくんだ」

と言って、携帯端末を渡されました。私はゲームがしたいのです。

正直世間などに興味はありません。

誰がどうなろうと私には関係ない——おっと、ふむふむ。

「中尉、マレフィキウム魔女宗とはなんなのでしょう？」

「二十歳になり力を失った魔法少女達。軍から追放された彼女らが作り上げた——魔法少女テロリズム。その代表的な組織の名前さ」

魔法少女はなぜか二十歳になると力を失います。

そもそもなぜ魔法少女が生まれてくるかわかっていません。

完全に先天的なもので、神の贈り物だの何だのと言われているぐらいです。

「元・魔法少女の集まりってことですか」

「ああ、彼女らの恐ろしいところは——次世代の魔法少女を手に入れて、テロに使用していることだ。それに政府や軍、さまざまな団体とつながりがあるとされている」

「魔法少女の力を……、テロに……」

「僕の思想からは外れている。魔法少女の本質は光だ」

「と言いますと？」

「魔法少女は人々を恐れさせ、傷つけるための力じゃない」

顔をしかめてそう言う中尉。なにか嫌な思い出があるようです。

「中尉は理想家なのです。ゆえに手段を選ぶ。それも相当トンチキな手段を」

「魔法少女をアイドルにするのがそんなに間違っているかな？」

「なにも私でやらなくても」

はあ。憂鬱になつてきました。ゲームに専念しましょう。

そう思つて携帯端末を中尉に返し、再びゲーム画面に目を向けます。

今やっているストラテジーゲーム『戦国シルヴァ』は攻撃時に戦闘アニメがあるのですが、この和刀というのは格好いいですね。

特に『居合』という剣術がめっちゃくちゃにかっこいいです。

ちよつと真似したくなりますね、ふふふ……。

などと遊んでいるとどこか懐かしい気配を後方から感じました。戦場で何度も体験したあの気配と同じです。

すぐさま中尉の裾を引っ張り、話しかけました。

「中尉、中尉、魔法の気配です」

「え？ わかるのかい？」

「私達は魔力をリーダー代わりにもしています。人一倍魔法の発動には敏感なのです」

「それは知ってるが……、誰かが魔力弾を撃ったわけでもないんだらう？」

魔力弾とは魔法少女の基本的な魔法の一つです。

魔力を扱うものであれば、誰かが一発撃てばすぐさまわかると思いますが。

もちろん今の反応はそんな大きなものではありません。

「たしかに微弱な反応でしたが、私ならわかります」

「すさまじいな……」

「確認しにいったもよろしいでしょうか？」

「誰かが機内で魔法を使ったということだね。わかった、ついていこう。案内してくれ」

「

そう言うと、中尉が席から立ち上がりました。私も合わせて立ち上がります。

「中尉は後をついてきてください。攻撃されても私はシールドを展開できますので」

シールド。これも魔法少女の基本的な魔法の一つです。

シールドが使えなければ魔法少女でないとすら言われているほどです。

個体によって、発動出来る強度や範囲の差が存在しますが……。

シールドが突破された時が魔法少女の死ぬときとすら言われています。

「女の子を盾にするのは業腹なんだがね」

「中尉では盾にもならないということですよ」

「……………僕も魔力がほしいね」

さて、魔法の気配は……。

ここから後方で魔法を使ってもばれないとなると、トイレですかね。

悲鳴が上がってないということは、攻撃性のあるものではないでしょう。

仲間を武装させるための構築魔法だと思われます。

文字通り実在する物品を構築する魔法です。

もちろん形作った魔力が尽きれば、その物品も消滅してしまいますが。

それでもかなり便利な魔法であることには違いありません。

「中尉」

私は魔法を掌に集中させ、脳内のイメージをそこに構築しました。

見た目はただのバナナ。しかしちゃんと引き金がついています。

これが構築魔法です。

「既に敵が武装している可能性があります。戦闘はすぐにも起きるでしょう」

バナナを中尉に手渡しました。

「装備しておいてください」

中尉が小首をかしげます。

「……バナナをかね？」

「引き金を引けば、非殺傷性の魔力弾が撃てます。跳弾や誤射を気にせず済むでしょう」

「それはわかるけど、なんでバナナなんだい？」

「実銃っぽくすると乗客に怖がられますから」

「いやはや……。本当に僕も魔法少女になろうかなあ」

「きつと可愛い魔法少女になれますよ、中尉なら」

欠片も思っていないことを言いながら、機内の通路を進んでいると――。

廊下からガスマスクをつけた連中が五名ほど現れました。

内、二人はその中でも異様な格好です。

一人はドクロの覆面をした黒コートの男……。いや性別も微妙なところですね。

一人は眼帯をしたゴシック風ドレスの少女。
右腕と右足がなんかメタリックだし、緑と黒の髪色が混ざったツインテールが本当に異様です。

魔法少女は魔力の影響か、髪色のバリエーションが多いと聞きますが……。

まあ、染めただけかもしれないですけど。

「動くな、おまえたち！」

ドクロがアサルトライフルを上空に掲げたかと思うと、勢いよく連射しました。

危ないな、と思いつつ天井を見てみると穴は空いていません。

アサルトライフルの貫通力ならば穴ぐらい空きそうなものですが。

やはり魔法で構築したものでしょうか。

それなら中尉に渡したバナナとさほど変わらないはずです。

「このジェット機は我々^{マレフィキウム}魔女宗が制圧した！」

「中尉、どうします？」

「犠牲なしに制圧できるかい？ 無理なら何もなくてもいい」

「と言われましてもねえ……」

「その娘！ 何をしている！」

ほら、廊下のご真ん中に立ってるから気づかれちゃいました。

こんなことなら見に来なきゃよかった。まあいいでしょう。どう

せ、コイツらの目的は……。

「何をしているものにも……。わざわざ来てあげたんですよ。探すの

面倒だろうから」

「なにっ!？」

「だって目的は私でしょ？」

それ以外にこんな飛行機をハイジャックする価値があるとは思えませんからね。

「なにを言っている!？」

「んあ？ 把握してないんですか？ 私を」

思わず中尉の方を向き直りました。

「中尉……、もしかしてこの飛行機、私以外になにか積んでますか」

「質問の意図がわからない。目の前の敵に集中したほうが良いと思うよ」

「……………とんだ食わせ物ですね、あなたも」

「何をグズグズ喋っている！ いいからおまえら廊下に跪け！」
面倒くさいと思いましたが、被害を出すわけにはいきません。

……………やるなら速攻。

私は地面を勢いよく蹴り、ごく僅かな距離を飛びました。
もちろん魔力の推進力による飛翔です。

そのまま対人魔法四式を、前方にいたガスマスクに浴びせました。
俗称「ライトブレード」。

手刀から発せられる光刃は神経を酩酊させ、たとえ低威力でも一撃で気絶させることができます。

もちろん胸部や頭部、首などの急所を狙う必要がありますが。
「が、あああああああ!?!」

前方に崩れ落ちるガスマスクを踏み台にして、ライトブレードを延長。

後方にいる四人にも斬りかかります。

「————ふんっ」

ですが、ドクロが展開したシールドによって防がれてしまいました。
た。

赤く発光する魔法陣。あれがシールドです。

それを発動したように見えるドクロが、ガスマスク達の装備を作り出した魔法少女なのでしょうか。

「魔法少女……………、だと?」

訝しげに首を傾げるドクロ。

しかし周りのガスマスク達の様子が少しおかしいです。

「撃て！ 撃てえ!!」

そう言って発砲してきました。周りには乗客もいるのに正気でしょうか。

いえ、魔法少女が敵だとわかり興奮しているのでしょう。

このままだと私のせいで被害が出てしまいますね。困った…………。

「ふんっ」

青く発光する魔法陣が銃撃を弾きます。

私もシールドを展開して、発砲を防ぐことができたということですよ。

やはり大した威力のない魔力弾のようですね。

これなら乗客すべてを守ることが出来そうです。さて、次は簡単なシールドでは防げませんよ……。

「エーラ、飛べ。飛行機ごと落としてしまえ」

「でも……」

「後で回収すれば済むことだ」

「……了解したわ」

おっと、何やら悪巧みですか。そうはさせませんよ。

今度はシールドすら貫く高威力のライトブレードで斬りかかります。

ドクロの顔を両断してやりました。

「……………からっぽ？」

中身がありません。遠隔操作……ということでしょうか。

ですが、バラバラにしてしまえば、ひとまず動けないはずですよ。

「ひ、ひいいいいいいいい!!」

「同胞殺しがああああああ!!」

残ったガスマスク二人が、私にアサルトライフルを向けました。

「シアンくん!」

……が、一人が何発か銃撃されて倒れます。中尉がバナナを構えていました。

そのままもう一人を、中尉が直々に肉弾戦で抑え込みます。

バリツというやつでしょうか。軍の教育プログラムにもありません。

なかなかやりますね。

——ですが、そんな展開をよそに巻き起こる轟音と爆風。

緑&黒髪の子が、飛行機の壁をぶち抜いたようです。

そんなことをすれば、外とのとんでもない気圧差で色々大変な事に

なるでしょうが、そこは魔法少女。風穴にも緑の魔法陣が貼り付けられています。

彼女はそこから飛び出していきました。

シールドは防御する対象を選ぶことができるので、それ以外はすり抜けることも可能なのです。コーヒーマーカーのフィルタみたいですね。

もちろん飛び出した後は、彼女にとって不要の長物ですので消えてしまいます。

代わりに私が蒼い魔法陣を展開しておきました。

「シアンくん！ 飛びたまえ！ さっきの子はこの機ごと落とすつもりだ！」

「言われなくとも！」

風穴が空いた飛行機の壁。

いくら出入り口になっている部位とは言え、決して脆弱な威力ではないでしょう。

そんな風穴を開けられる魔法少女ならば、数秒でエンジン部を破壊できるはずです。

「シアン・ウエルテクス——行きます！」

そう言つて、飛行機から飛び出すと、外は雲の海。

突然襲われた時に発動するよう設定していたシールドが発生しています。

そういえば何かを忘れて……。おっと、さっさと装備を展開しましょう。

「構築魔法、展開」

シールドドレス構築完了。

海よりも蒼いこのコートが私の戦闘衣装です。

これで寒さやら高速飛行の衝撃やら諸々を95%以上防ぐことができます。

シールドのちよつとした応用ですね。腰部ホバー構築完了。翼のようなホバーです。

別にこれがなくても飛べますが、速度がけっこう異なってきました。

リリカルマジカルアンチマテリアルライフル——構成完了。
リリカルでマジカルなアンチマテリアルライフルです。こう呼ぶのは私一人しかいません。

そもそも構築する人も少ないです。可愛いのに……。

ホバーから魔力を噴出し、飛翔魔法を起動させる。

よし、一年ぶりなのに感覚はさほど変わりありません。

目の前には——さきほどの緑&黒髪の子。どうやら私を待っていたようです。

「思い出したよ。アンタさあ……。蒼天の魔女でしょ？」

おやおや通信魔法。どうやら本当に私と話したいみたいですね。

「ほう、私の二つ名を知ってるってことは。知り合いですか？」

蒼天の魔女。第二^{フル}次^ブ魔法少女大戦^スで呼ばれるようになった二つ名です。

理由は知りませんがね。

「スカしてんねえ！ エーラ・ヴィヴァーチエ！ アンタの部隊にいた女さー！」

「申し訳ありません。戦時中はかなりボケーツと生きていたので……。なにか思い出深いエピソードでもあったりしませんか？」

「この右半身！ 敵に吹き飛ばされて墜落した時にアンタがアタシを回収したツツ！」

「ああ……」

まあまあ覚えがあります。かなり痛ましい怪我だったので。

髪色で気づけよという話ですが、魔法少女は彼女みたいなド派手な髪色ばかりだったので、逆に記憶に残りませんでしたね。

しかしそうになると、彼女にとって私は恩人なのでは……。

「無事、社会復帰できたようで何よりです」

「ほごくなツツ！ アンタがもうちよつと上手く立ち回ってりや、アタシはこんな怪我せずに済んだんだツツ！」

「自分の実力不足で喚かれても困ります。そもそも指揮をとったのは私ではありませんし……、文句なら軍部か敵に言うべきでは？」

「だから^{マレフィキウム}魔女宗なんてやってるのさツツ！」

「社会復帰は失敗したようですね」

「ふぎけんなツツ！ アタシが社会だツツ！」

「では私の敵です」

エーラが右手にガトリング砲を構築しました。

ちよつとまずいですね。あれから飛行機を守れということですか。

案の定、ガトリングを飛行機に向けて発砲しました。

次々と撃ち出される緑色の光弾。すかさず飛行機に対して、シールドを展開します。

広がる魔法陣。撃たれた場所から弾ける青色の閃光。

私のシールドが光弾を防いでいる証拠です。

「ハッハア！ いくら蒼天の魔女様でもそんなデカブツ守護りながら

ヤレんのかよ!？」

「心外ですね。出来ないと思つてたんですか？」

「無理だろツツ！ 部下も守れない雑魚じゃなア！」

「……………あなたが帝国の戦乙女部隊ヴァルキリーと一緒にわけないでしょ」

帝国——。北方にある大国です。

その魔法少女達。中でも精銳が戦乙女部隊ヴァルキリー。

あれと戦つた時は私でも死ぬかと思いましたがね。

さてと。ムカついたので、とりあえずライフルで一発。

ライフルから放たれるのは弾ではなく、銃口から長々と続く極太ビームです。

それを数本撃ち出しましたが、見事に避けられました。

まあ牽制にはなつたんじゃないでしょうか。

……………少し距離を詰めますか。飛翔にはやや自信があります。

向こうも私の狙いに勘付いたのか飛行機をガトリングで撃ちながら、飛行機の上へと飛んでいきます。

ぐるぐると飛行機周辺を旋回して、私に撃たせないつもりでしょう。

ふむ、どうするか…………。いや、良いことを思いつきました。

私は飛行機に接触し、その上を走り出しました。

当然旋回するのならば、コーナーが短い者が勝ちますからね。

加えて飛翔のための魔力を前進に向けられます。

「どこ走ってやがるツツ!？」

「飛行機の上ですが？」

そのままライフルをエーラに向けて射撃。しかしなかなか当たりません。

射撃下手なのかな、私……。それともやはり一年のブランクがあるのか。

エーラもガトリングを私に向けて発砲してきます。

おかげでシールドで防ぐ箇所が減る分、飛行機を狙われるより防衛が楽になりました。

さて——一足先に飛行機から飛び降りますか。

そのまま、同じように飛び出してきたエーラを下方から狙い撃ちにしました。

これはエーラも予想外だったようで、緑色の閃光が弾き飛びました。

エーラのシールドがビームを弾いた証拠です。

「アンタ……、ふざけてるツツ!」

そのままエーラがガトリングを向けてきました。しかし私はあえて急上昇。

エーラに近づくためです。

「なんですって……!？」

「終わりです」

ちょうどエーラと高低差が入れ替わった最中。

手が届くほどの至近距離からビームを撃ち出しました。

「があああああああ!!」

どうやらシールドで防ぎきれなかったようですね。

魔力弾はライトブレードと同じように、直撃すれば神経が酩酊します。……終わりです。

そのまま落下していきましたし——、命はないでしょう。

一応回収するべきか中尉確認しますか。通信魔法……、索敵、中尉……つと。

おっと、魂の反応を見つけました。当然のことですが、機内にいるようです。

「中尉、マレフィキウム魔女宗エラトマ・ヴィヴァーチェを撃墜しました」

『うわっ!? ……って、なんだ。シエロくんか。彼女は死んだのか?』

「今から回収すれば生きてるでしょうが……」

『そうも言っていられない。先程のドクロマスクの男。中身がなかったらどう?』

「ええ、驚きました」

『魔法少女が動かしていたはずだ。そしてここは上空一万メートル前後の飛行機の中だ』

「つまり……?」

『外部から遠隔操作できるはずも、それにキミが気づかないはずもない。まだ機内に魔法少女が潜伏している可能性が高いということ』

「……確かにそうなりますね」

『そうなるも僕だけでは対処できない。戻ってきてくれ』

「中尉なら何があっても助けると命じるのかと」

『僕だって現実と夢の区別ぐらい付いてるさ。キミ達と違って凡人だからね』

「………まあいいでしょう」

いつ目覚めるかわからない魔法少女を拘束しながら、他の魔法少女を討伐するなんてこと……、中尉と二人きりでは土台無理なことです。中尉の判断は間違っています。

「しかし中尉、何を隠しているんです? エラトマ・ヴィヴァーチェは前線から外されたと言っても魔法少女です。身分を証明する操縦者ドレイバーもなしに飛行機に乗れるとは思えません」

『何かしらの手引きがあったって言いたいのかい?』

「そうなりますね。中尉の隠し事次第ですが」

『すまないが、その話はまた後でしょう。最優先事項は何だと思う?』
「中尉の身を守ることですか」

『人々を守ることだ』

「それが魔法少女の本質……ですか」

たしかにこんなところで――。

下手したら傍受されかねない通信魔法を使って話すことではありません。

機内に戻るとしましょう。

デート的ななにか

無事ハイジャックのいざごきは終わりましたが、風穴が空いたこともあって、飛行機はオベイロンにたどり着くことなく、付近の空港に着陸しました。

加えて事情聴取のため、数日ほど現地に泊まることに。

いい機会だからと、中尉にはホテルのカラオケルームで歌わされたり、踊らされたりと、やりたいほうだいされました。それはもう、ええ……。やりほうだい……。ええ……。

『へえ、なかなか筋が良いじゃないか』

『連盟最強の魔法少女がそんな足取りでいいのかい？』

『ああ、ステップも出来るようになったじゃないか。すごいすごい。』

一日二日で——よくもまあ……。運動神経は良いほうなんだね』

『振り付けもバツチリだ。まあ、今回は踊らないけどね』

『そうだ！ 何の曲歌うか決めてないよね？』

『僕はこのツインテールレディ☆マジカルひなみんのオープニング曲なんかが良いと思うんだよね。えっ、そんな歌、絶対に歌いたくないって？ わかった。僕が手本をみせよう』

『……。どうした？ なぜ笑うんだい？』

地獄の……。！ 地獄の日々でした……。！

ツインテールレディ☆マジカルひなみんってなんなんですか。

聞いたところ、中尉が制作を指揮したプロパガンダアニメーションらしいですが……。

流星にあのノリで歌いたくない……。！

しかしそんな日々もようやく終わりを迎える日が来たのです。

「結局、アレ以上の襲撃はありませんでしたね」

オベイロンから迎えが来るらしく、空港前のベンチで待っていたところでした。

二人で姿勢良く、ベンチに座っている感じです。

少しばかり暑いので、中尉などはアイスを齧っています。

私の手にはひんやりと冷えたスポーツ飲料が握られていました。

「……だね。他のメンバーもあのドクロマスクの詳細は知らないようだった」

中尉がアイスを舐めつつ、そう答えます。

「軍に登録されている魔法少女も機内にはいませんでした」

「だがそれは結果論だ。登録されていない魔法少女だって乗っていたかもしれないし」

「それはそうですが」

「だから君が重荷に思うことはない」

「思っています」

「そうかな？ 割と繊細なんじゃないのかい、君」

「……………それで、何を運んでいたんですか？」

隣には明らかに冷蔵庫並の大きさのなにか。

「……いやかなり冷蔵庫っぽいですが、冷蔵庫ではないかと思いたいです。」

仮に冷蔵庫なら何を入れてるんでしょうか。マグロですかね。

「気になるかい？」

「まあ、そうですね」

「軍事機密だから内緒だよ」

「どうせ私を警備代わりに使ったんでしょう」

連盟最強の魔法少女である私が乗っている以上の警備などありませんからね。

現にハイジャック犯を無事、鎮圧することが出来ました。

つまりそんな連盟最強を使つてまで秘密裏に運びたかった代物ということです。

「ふふふふふふ」

にこやかに微笑む中尉。ムカつくので無視してゲームをプレイしていることにしました。

それにしても夏に近いとは言え、南方は暑いですね。上空とはえらい違いだ。

日除け用の屋根がなければ、暑い太陽の日差しが直撃していたところ

ろです。

私がようやくステージをクリアしそうになった時です。

様々な軍用車が私達の前に止まり、そこから何人もの軍人が降りてきました。

全員白い軍服を身に纏っています。

ただ……、中尉のような装飾豊かなものではなく、簡易な作業服という感じです。

軍用車の中央にあるリムジンから降りてきたのは、金髪の美女でした。

腰ほどまでに伸びたその髪をポニーテールにしており、綺羅びやかな装飾の軍服をまるでマントのように着こなしています。頭にかぶった軍帽がいい味出しています

「やあ、中尉。わしの魔法少女はどこじゃ？」

「僕のだけど」

「おぬしのではないだろう」

「キミでもないよ」

「否、全ての魔法少女は我輩のものだと自負しておる」

「そんな自負は必要無いと思うんだけど……。シアンくん。タニタ・セグイン大佐だ。これから向かうオベイロン軍事局の局長をしている。挨拶しなさい」

「ああ……。お初にお目にかかります。シアン・ウエルテクスと申します。階級は曹長。以後、お見知りおきをお!？」

恭しくスカート裾を掴んだ例の挨拶をしようとしたら――。

突然、セグイン大佐に抱きつかれました。いまにも頬にキスしかねない勢いです。

避けようと思えば、正直避けられはしましたが、相手は上官。

後が怖いのでそのまま抱きつかれました。

「か〜くわ〜く〜い〜い!! おい、パスカル! どこでこんなもの引っ掛けた!」

「中央軍事局の独房に一年間、軟禁されていたよ」

「なにをお!? 相変わらず上層部はクスばかりじゃな!」

「公然でそういう事を言うのは危険だぞ？」

「はっ！ わしの部下に、わしを裏切るような者はおらんわい！」

「あの……………、そろそろ……………、離してほしいんですが……………」

そう抜かしている間にもゴシゴシと頭を撫でられています。

なんだか香水のいい匂いもするし、色々と軟らかい物があたっている……………！

悶えていると、パッと手を離してくれました。

「ああ、すまんすまん。わしの悪い癖じゃ。わし、魔法少女が好みでな。彼女らは見目も性能面も例外なく美しい。人類の上位存在と言っても過言ではないだろう。老けてしまえばその力が失われるのが残念なところだが……………。それはわしも一緒じゃったからな」

「はあ……………」

要するに魔法少女フリーク。

……………またこの手の変人ですか。

中尉だけでいいんですよ、そういうのは。

「シアン、ドン引きしたような顔しないで。セグイン大佐は元魔法少女だね。十三年前の第一次魔法少女大戦（ワルプルギス）を生き残ったお方なんだ」

「操縦者（ドライバー）がこいつの父親でな！ 色々仕込まれたものじゃわい！」

「い、色々ですか……………」

「そう、色々な！」

少しばかりいやらしい想像をしてしまいます。一応私も知識ぐらいは、ええ。

「セグイン、誤解を与えるようなこと言わないでくれ」

「くつくつく、おぬしの親父がうら若き少女に手を出すような輩でなかったことだけは誇るといいぞ。おぬしはどうか知らんがな」

「危機感を煽るようなことも言わないでくれツツ!!」

「一週間ほど昼夜を共にしましたが、指一本触れられたことはないと言っておきますよ」

いや指一本は言いすぎかな。ちよくちよく触られてる気もします。

主に頭を撫でようとしてくる。

「気をつけるよ、こやつはそうやって油断させてから……」

——と言いつつ、またセグイン大佐が距離を近づけてきました。

この人、いちいち人との距離が近いな……。どうやら私の顔を吟味しているようです。

ふくむ、などと、顎に指を当てて考え込んですらいいます。

「パスカル、趣味が悪いぞ」

「女の子を傷つけるようなことを言わないでくれないかな!？」

「リリカの面影で選んだじやろう、この娘」

「……………別にそんなことはない」

リリカ……。中尉が以前言っていた幼馴染、リリカ・プレガーレのことでしょうか。

彼女も赤髪。確かに細部は違うとは言え、雰囲気ぐらいはあの写真と私は似ています。

確かに故人の面影で選ばれたのだとしたら、趣味が悪いと言えますね。

セグイン大佐は冷蔵庫を一瞥し、小さく舌打ちしました。

「おぬしら、積荷をさっさと運べ！ 出発するぞ、行動は迅速になー!」

その命令に部下たちが、冷蔵庫をトラックへと運び入れます。

恐らく内部で動かない用に固定しているのでしようが、こちらからは見えません。

「ほらほら、二人とも。リムジンに乗れい。あ、待って。わしが間に挟まる」

「お好きにどうぞ」

「パスカル、この娘冷たいぞ……?」

「初対面から割とそうだよ」

リムジンに乗り込むと、セグイン大佐が肩を抱いてきました。

どうやら中尉にも同じことをしているようです。

両手に花——ならぬなんと言うんでしょうかね。わかりません。

そういうしている内に車両が次々と出発し、リムジンも続いて出発しました。

「さて、積荷の輸送に関してじゃが」

おつ、どうやら話してくれるようです。ハイジャックの件は私も気になっていました。

「わざわざ民間の航空機まで使ったというのになぜバレた……？ あの積荷のことはわしと部下、そしてパスカル、おぬしと上層部の一部ぐらいしか知らないはずじゃ」

「まったくわからない。上層部が裏切ったんだとしたら、あまりにも計画性がない」

「ほう……？」

「なにせシアンの事を知らなかった」

「特記戦力はたかだか魔法少女一名程度。未登録の者が潜んでいたという疑惑があるが、結局出てこなかったという事は……」

「シアンを相手取れるほどではなかったってことだね」

「あの、私ってそんなにすごいんですか？」

うわっ、二人してぎよつとした顔で睨んできた。

「セグイン、これ資料だ」

中尉から手渡された紙の束をセグイン大佐がペラペラと紙をめくります。

その内、一枚をこちらに見せてきました。私の身体的特徴、能力の備考などが書かれており、それから左上に大きくSと記された判子がされていますね。

「軍に登録されておる魔法少女はそれぞれD、C、B、A、Sでランク分けされている。Sは中でも最上級のランク。この二十年で二桁も居ない連盟最強クラスの魔法少女であることを意味しておる」

「こんなもの、見た覚えがありませんが」

私が連盟最強と言われていることぐらいは知ってますが。

「当然じゃ。おぬしら魔法少女には知らされておらん。知る必要もない。しかし操縦者（ドライバー）には当然のごとく閲覧権限がある」
ふむふむ……。

あ、割と従順だが戦力的に考えて危険因子であり、軍での立場は年若い魔法少女と同じくあまり昇進させないように、と書かれています。

す。

だから私、かなりの戦果なのにまだ曹長だったんですね。最悪だ。今からでも昇進してくれないかな。

「しかしなぜ私にこれを？」

「ランクを担当に見せるかどうかは操縦者（ドライバー）に一任されておるからな。ただし……、おぬしら魔法少女は無闇矢鱈にランクを口外してはならんぞ」

「ふむ……、エーラ・ヴィヴァーチェはどのランクだったんですか？」

「Bランクじゃな。Cランク以下は武装を用いなければ、飛翔すらままならん」

「エーラでB……。でもけっこう苦戦しましたよ？」

「ははは、お主が本気で撃てばエーラどころか航空機すら余波で吹き飛んでるじゃろ」

「……………まあ」

実際そのとおりです。私が本気で撃てば飛行機の安全が保証できなかったのです、少しばかり手加減していました。それに……。

「潜んでいるであろう魔法少女への警戒も兼ねて、魔力を温存する必要があった。つまり到底本気を出せる状況ではなかったんじゃろ？」

「ええ、捕縛できる可能性もありましたし、中尉の指示次第では実際そうなっていました」

「それもあるけど……、知り合いをなるべく始末したくなかったんだろ？」

じつ……、とこちらを見つめながら、そう聞いてくる中尉。

嫌な質問をしてきますね……。

「いえ、敵対者にそのような情を持ち込むことはいたしません」

「本当かなあ」

「ここら。あまりイジメてやるなパスカル。元同胞に情をかけるぐらい普通の事じゃ。命令違反したわけでもないのだから、そう目くじらを立てることもない」

「僕はシアンくんは優しいなって話をしたかっただけだよ」

「こやつ……………」

セグイン大佐が、若干軽蔑したような視線を中尉に向けます。そうしてこちらに囁きかけてきました。

「気をつけるよ。こやつ、ちよつとばかし心のネジが外れておるからな」

「それはまあ、薄々。はい」

さすがは大佐の地位に就いているだけのことはある方です。

人のことをよく見ておられる。

「なにかあったらわしに相談せよ。これ連絡先じゃから」

そう言つて電話番号とメールアドレスの書かれた紙を渡されました。

私、携帯端末もパソコンも持っていないんですが。

用があつたら公衆電話でも使うかなあ。軍事局には何個が置かれてたはず。

「あ、パスカル！ さてはシアンに携帯やらなんやら渡してないな！」
「さ、さすがにちよつと勇気がいるかな！ ニュースとか知るのはいいことだと思ふけれど、ほら、青少年はよろしくないサイトとか色々あるしさ」

「連絡用のだけでも渡しておけい！ 万が一はぐれた時にどうするんじやー！」

「わ、わかつたよ。オベイロンに着いたら探してみるか」

「オベイロンに着いたら、か……」

そう呟いて、セグイン大佐はにんまりと笑いました。

「そうじや！ シアン、オベイロンに着いたらわしとデートせんか!？」

「デートですか？」

「ああ、なんでも買ってやるぞ？ どうじや？」

中尉を見ると、困つたように肩をすくめていました。

「どうやら断れないようです。ですがつまらない方ではなさそうですし……」。

まあ、いいでしょう。

■ ■ ■

見知らぬ天井という言葉がありますが、そもそも天井にそれほど違

いがあるのでしょうか。

せいぜい照明の形と、壁紙の色ぐらの違いだと思われれます。
　　瞼を開くと、壁紙の色まではそう違いありませんが、照明はあまり見覚えのない形をしていました。四角く、のっぺりとした――、まあ照明など誰も興味はないでしょう。

私も興味はありません。大事なのは目を覚ましたら見知らぬ天井だったということ。

「ふむ……………」

昨日、リムジンに乗っている折に休眠を申し出た記憶があります。護衛も潤沢だったし、疲労が溜まっていたのに起きているのは非効率的だと感じたからですが……。

そのままどこかに運ばれたようですね。

しかし、さほど慌てるような状況ではないでしょう。

部屋は狭いですがベッドはふかふかとしており、劣悪な扱いではないことがわかります。化粧台とシャワールームへの半透明な入り口、そして部屋の出入り口があるようです。

とりあえずベッドから起き上がると――。

『おはようございます。シアン・ウエルテクス様。着替えと食事ををご用意いたします』

そんな女性の声が聞こえたかと思うと、壁からトレイが出てきました。

そこにはパンとスープ、サラダとスクランブルエッグ。

おまけにウインナーとミルクが並んだモーニングセットが。

隣にはバスタオルと下着、そして私が購入していた黒いワンピースが畳まれて出てきました。

ふむ、この扱いは独房にいた頃を思い出しますね。

ひとまず化粧台で歯を磨き、シャワールームに向かうことにしました。

流石にシャワールームにカメラなどは設置されてないようです。ここで魔法を使えばはたして感知されるのでしょうか……。試す気もないので、普通に浴びさせてもらいますが。

シャワールームを出て、服を着ます。朝食をいただきますよ。
まあ……、味は普通ですね、はい。不味いということはけつしてありませんよ。何でも美味しく食べるといのが、私のモットーではありませんが。

はい。普通の味です。もぐもぐ。朝食を食べ終わると、暇になりました。

なにもせず部屋で待っているのは得意ではありませんが。

……などと考えていると、扉がウィーンと横に開きました。

「やあ、シアンくんおはよう。今は朝九時だ。もう食事は済ませたかな？」

どうやら中尉のようですね。先日と同じような白スーツを着ています。

「ええ、既に。中尉は？」

「僕も済ませたところさ。ああ……。状況説明が必要かな？」

「確認だけ。車内で眠ったあと、私はここに運ばれたわけですね」

「ああ、ここはオベイロン軍事局地下三階だね。目的は君の休息で、僕はその後仕事を済ませ、与えられた部屋で寝たよ。他に質問は？」

「ふむ……。なぜ同室ではないのですか？ やはり私が魔法少女だからでしょうか」

「いや……。君を一人の女の子として尊重した結果だけど？」

「十二歳ですよ？」

「年齢は関係ないだろ」

「つまり中尉はロリコンなんですか？」

「どうしてそうなる!? そもそも君は僕と同室が良かったのかい!?」
「からかっただけですよ」

中尉が大きな溜息をついて、こめかみを押さえています。

年上を手球にとることなどいまままでありませんでしたから新鮮な気分です。

……本当にロリコンじゃないですよね。

「まあいいや……。昨日言っていた携帯電話と、パーティ用のドレスを買いに行くよ」

「ドレスならばここに来る前に買ったはずでは？」

「セグインに見せたらおまえはセンスが無いと言われてね」

お手上げと言わんばかりに、両手を広げる中尉。

「逆に中尉はついてくるんですか？」

「荷物持ちぐらいいるだろ？ 君一人いれば事足りるとは言え、形式上の護衛もね」

「護衛対象が増えるんですけど……」

「ははは、よろしく頼むよ」

「はあ……」

ともあれ、上官に呼び出されているのだから行かなくてはなりません。

私は部屋を出ていく中尉のあとをついていくことに。

さてエレベーターに乗りますと、無機質な四角形の空間に注目するところなど一点しかなく——自然に、止まる階を決めるボタンを見ることとなりました。

地下三階から地上十階までが存在しました。どうやらこの軍事局は高層ビルとして作られているようですね。中尉が一階のボタンを押ししました。

「十階まであるなんて珍しい軍事局ですね」

「ああ、このオペイロン軍事局はVIPが快適に過ごせるように設計されているんだ。パーティをするのもこの軍事局ってわけさ」

「防衛は完璧、というわけですか」

「そうだね。対策でもされてなきや、Aランクの魔法少女までは君の力を借りなくてもなんとかなるんじゃないかなあ？」

「対策をされてなければ、というのがいささか不安ですが……」

秘密裏に運ばれていた荷物を狙ったあのハイジャック。普通ではありえませんが。

恐らく——軍の中に内通者がいる。つまり対策されている可能性も十分に存在するわけです。

もちろん中尉や上層部としてそれは百も承知でしょうが……。

いざとなると私の出番があるかもしれません。気を引き締めてお

きましよう。

さて、話している間に一階につきましたので、エレベーターから降りることに。

そのまま受付のあるエントランスを超えて、外に出ます。

入り口付近にある噴水の前で、セグイン大佐がオープンカーに乗っていました。

丸々としたサングラスに、色彩豊かなカッターシャツという居で立ち。

他国の言葉で「あろは」と言うのでしたっけ……。

「やあやあ！ 二人共」

「随分とごきげんですね、セグイン大佐」

「そりやあカワイイコちゃんとデートできるからう！」

「おっと、僕のことはどうでもいいってか？」

「おぬしは……、つけあわせじゃ！ ええい、いいから乗れ乗れ！」

手招きされたので乗車。中尉も、私と同じく後部座席乗ろうとしたが「おぬしはこっち」と言われ、助手席に寄せられました。

……もしかしてセグイン大佐は中尉に気があるのではないでしょうか。

二人共、古い付き合いのようですし、そうであってもおかしくありません。

そうなる私はどうやらだしにされているようですね。護衛も出来るし、ちようどいいといったところでしょうか。

ふっ——、私とて人の恋路を邪魔するほど無粋な人間ではありません。応援させていただきますよ、セグイン大佐。

「買物物がてらオベイロンの町並みを案内しようと思うんじゃが、どうじゃろうか？」

「おいおい。パーティは明日の夜だぞ？ シアンくんは歌の練習もさせておきたいんだが」

「かまいませんよ。歌の練習ならここに来るまでにそれなりにやったじゃないですか」

「それはそうだけどさ……」

「なんなら夜通し、カラオケルームで歌うつてのも面白そうじゃない！」
「声がかれない程度にお願いしますよ」

話している間にオープンカーが発進しました。
しっかりと整備された街道。次々に植えられた自然の数々。

漆喰を塗られた風情のある建造物の数々——と、なるほど観光都市の名に恥じない街並みです。

「ふん……。このオベイロンは元々、森林が豊富な山岳地帯じゃった。
禿山にされたそこに建築物をいくつも打ち立てて、更に無理やり森林
を植え付けたのがこの風景じゃ。さながら油絵のようじゃろ」

「さあ……。環境問題には疎いので」

「僕は仕方のないことだと思うよ。このオベイロンの鉱山は連盟の貴
重なエネルギー源だ。多少の環境の悪化を通してでも運用する価値
がある」

「おぬしら……。ええいつ、もつと環境に興味持たんか！」

「善処します」

「持った上での感想なんだけどね」

「上官の気分を損ねないそれっぽい事を言えるようになれという意味
じゃ、パスカル」

「大体、軍事局じゃ環境問題を解決する新エネルギーを開発してるそ
うじゃないか」

「軍事機密じゃぞ、それ」

じろり、と中尉を睨むセグイン大佐。

中尉も悪びれる気はないようで、たしなめるように肩をすくめてい
ます。

そのままオープンカーは進んでいき、いわゆるショッピングモール
という施設の屋上駐車場に止まりました。

ここで携帯電話や私のドレスを買うつもりなのでしょう。

「シアンちゃんは他になにか欲しいもんあるか？」

オープンカーから降りると、キーホルダーの輪っかに指を引っ掛け
て、セグイン大佐がくるくると鍵を回し始めました。もちろん車の鍵
です。

「いえ、一通り必要なものはつい数日前中尉に買ってもらったところ
ですし、特には……」

「ふうん。新発売のゲームとかもか？」

「新発売のゲーム……!?!」

「売上ランキング一位のコミックとかもか？」

「売上ランキング一位のコミック!?!」

「せ、セグイン。あまり甘やかすなよ」

「中尉は黙っててください!! これは上官命令! 上官命令ですから
!」

「娯楽の味を知ってしまった優等生の顔をしておる……」

■ ■ ■

「きやああああああああ!!」

女性同士のデリケートな買い物というものはどうしてもあるもの
で、そういう時は中尉には外れてもらい、適当に時間を潰してもらっ
たことになりました。

その間、中尉の護衛がいなくなってしまうわけですが、そもそもの
話をすれば中尉はプライベートにまで護衛をつけるほどの地位では
ありません。家柄は良いですが。

私はと言うと、服屋にてセグイン大佐の着せかえ人形となっていま
した。もちろん中尉だけではなかなか厳しい下着事情までフォロー
してくれるのは助かるのですが。

私が着替えるたびにいちいち黄色い歓声を上げなくても……。

「よし、シアンちゃん! 次はこれ着てみよつか!!」

——と言って、持ってこられたのはメイド服でした。

流石に給仕になった覚えはございません。というよりも——。

「大佐、なんかちよつとキャラ変わってませんか？」

「そ、そんなことないぞ? ほらほら早く!」

「まったく……」

かれこれ一時間近く付き合っているわけですが、飽きる気配があり
ません。

やや疲労感を感じますね。精神的な疲労です。

しかし中尉がいない間に聞いておきたいことがいくつもあります。
いい加減聞いてみましょう。

「セグイン大佐は中尉のこと好きなんですか？」
「ぶっほお!？」

「なにを吹き出してるんですか……」

ターンしてみてくれだのなんだの、私のメイド姿を存分に楽しんでたセグイン大佐が唐突に唾を吹き出しました。汚いですね。しかしこの反応は……。

「やつぱり好きなんですね」

「いや、そのお……。でもあいつももうひとりの幼馴染のほうが好きだったんじゃない」

「ああ。リリカ・プレガーレさんですか。どのような人だったんですか？」

「明朗快活。言いたいことはハッキリ言う。見た目以外はおぬしと似ても似つかないタイプじゃったな」

「見た目以外ってなんですか……」

「見た目はよく似てるんじゃないよ、ほんとに」

やはりリリカさんの面影を感じて、中尉は私を選んだのでしょうか。

その事を話すセグイン大佐の顔はどこか寂しげに見えます。

「リリカさんはいったいどうなったのですか？」

「そうじゃな……。奴は死んでしまった」

セグイン大佐が顔を伏せました。

「死因は……聞いてもいい感じなんでしょうか？」

「いや……。あまり聞かんほうがいい。もうこの話はやめよう」

ふむ、話を打ち切られましたか。しかもう少し聞いておきたいことがあります。

中尉の魔法少女へのこだわりについてです。

セグイン大佐は話を打ち切りたいみたいですが、中尉の思想に関しては私の今後に関わることでですからね。

聞いておかないと。リリカさんの死因でなければ問題ないでしょ

う。

「ところでなぜ中尉はあれほど魔法少女に熱心なのでしょうか？」

「うむ……。それもリリカのせいじゃ」

「といたしますと？」

『魔法少女の本質は光』とか言ってたことじゃろ？」

「ああ……。言ってみましたね」

「あれはリリカの口癖なのじゃ。いわば遺言——、呪いじやよ」

「ますますリリカさんとやらに中尉が縛られている疑惑が出てきました。」

「しっかりと中尉に本心を聞いておいたほうがいいのでしょうか。」

「正直、本気でリリカさんの代替物にされるのは勘弁してほしいところですよ。」

「ふむ。辛気臭そうな顔しよって」

「してません」

「それこそ今を生きるおぬしが見返してやればいいだけのこと」

「……はあ？」

「ふふふ、みなまで言わんで良い」

「何やら勘違いされているようですね。」

「別に私は中尉に対して、特別思うようなことはない——と思います。」

「そりゃあ、確かに命の恩人で保護者ではありますが、それだけです。」

「その最善策はもちろん着飾ることじゃな！」

「セグイン大佐が新しい服を、文字通り山積みにして持ってきました。」

「うぐぐぐぐ。しばらくは大佐の思うがままの着せかえ人形ですね、これは……。」

「それから一、二時間してようやく着せ替え人形から解放されました。」

「今度はいわゆるケータイショップで、携帯選びです。」

「様々な携帯電話がスタイリッシュに並んでいる店内は近未来感を感じさせます。」

こういうことは自分が専門だと言わんばかりに、中尉がウキウキとした顔をしていました。

「ここで延々時間を潰してたんですね……。」

「君達が服を選んでいる間、僕も携帯を選んでたんだ！」

「ずいぶんウキウキですね」

「こういうのにはちよつと詳しくてね……。」

そう言っ出てされたのはカード型の携帯。中尉も使っていたものですね。

「これは『カードフォン』の最新シリーズ！ 今一番スペックが高いものなんだ！ カード型と言うとちよつと古い印象を感じるけど、その分安定した運用ができるから、初心者でも安心して使えると思うよ！」

「はあ……。」

「まだ二つほどあるんだ！ 待ってね！」

ずいぶん早口でそう唱えると、中尉はそのまま二つ目の端末を掲げてきました。

眼鏡型の携帯のようです。というか眼鏡です。眼鏡以外の何物でもありません。

「これは『インテリングス』！ 眼鏡に画面を表示するタイプのシリーズだ！ 操作が全部ゼスチャーと音声になっていて、慣れていないと使いにくいって欠点はあるけど……。わざわざ手に持つる必要もないし、画面の没入感は凄いいよ！ で、最後のは……。」

「では中尉が使ってるのと同じもので」

「待った！ もし戦闘の際に両手がふさがってたら使えないよね？！」

「通信魔法があります」

「遠距離に連絡することだってあるだろ!？」

「なにが言いたいんですか？」

まあいいでしょう。最後のを確認してからでも遅くはありません。

最後に見せられたのは耳当てを片方だけ外したような円盤状の物体。

中尉が真ん中のボタンを押すと、割れて横長に伸びました。

伸びた箇所が画面になるようです。

「これは『ユーフォン』！中にペーパー式の画面が入っているから、伸び縮み出来るんだ！耳につければ音声操作で、フリーハンドで操作できるって代物さ！」

中尉が再び円盤に戻すと、今度は右耳に装着してみせました。

『カードフォン』と『インテリングス』のいいところだろうか？まあその分やや操作が煩雑だし、インテリングスの没入感もないんだけどね」

うう……。どうでもいい……。

しかし私はこういったことに対して門外漢。

さつきからだんまりのセグイン大佐を見ると、ずっとストラップコーナーで品定めをしていました。携帯端末本体には興味なさそうですね。

大佐の意見は聞かなくていいようです。ココは素直に……。

「中尉のオススメを買ってください」

「となると、まだ僕が持つてないユーフォンかな」

「他二つは持つてるんですか？何のために二つも……」

「二応便利なんだよ!? カードフォンは操作しやすいし、インテリングスは手が離せない時やこそこそ話したい時なんかにも使えるんだ！」

両手をわたわたと振って、言い訳をする中尉。この人は本当に、もう……！

結局、ユーフォンを買ってもらおうことにしました。

最終決戦

二日目。先日と同じ部屋で私は目を覚ましました。あの後、カラオケに行つて延々歌うことになりましたが……。ツインテールレディ☆マジカルひなみんのオープニング曲とやらを、あの二人が何度もローテーションしていました。

デュエットをするのはやめてもらえませんかねえ……。結局、私まで何度か歌わされる羽目になりました。

そういえばパーティで歌う曲、何にしましょうかね。中尉から候補のプレイリストを渡されたので、ユーフォンで試聴できます。

VIPのパーティで歌つても不自然じゃないしんみりできる曲……。後で考えるとしましょう。

まずは昨日と同じように身支度をして、朝食をいただくとしましよう。

そう考え、化粧台に向かい、歯を磨いていた時のことです。

……私の背後に誰かいる？

股まで赤髪が伸びたような全裸の女です。

おっぱいもそこそこあるようで、背は——、私よりいくらか伸びたぐらいでしょうか。

当然そんなものを見て、じつとしていいる私ではありません。振り向きませんが、誰もいませんでした。どういうことでしょうか。魔法の気配はしなかったです。

いや、ほんの僅かに魔力の残り香があるように感じます。となると誰かが遠方で幻覚魔法でも使つて、幻影を見せたのか。しかし何のためになんかそんな事を……。

しばらく考え込んでいると、セグイン大佐が辛気臭そうな顔で部屋に入ってきました。

中尉も一緒のようです。

「ああ！ 大佐！ 中尉！ 今、謎の女の影が鏡に映ってたんです！」

「はあ？ 幽霊でも見たんか？」

「魔法少女に靈感つてあるものなのかい？」

「見る、という者もおる。ただし全てのものがそうではない」

「幽霊ですか。そんなもの見たことがなかったんですけど……」

「もしかすると、固有魔法に目覚めつつあるのかもしれないぞ？」

固有魔法。文字通り一部の魔法少女のみが有する固有の魔法です。

類似する固有魔法はありますが、原則的に固有魔法は個体それぞれで異なっています。

中には幽霊を視認し、操る——なんて固有魔法もあるのだとか。

正直、幽霊なんて信じていないのですが……。

「ところでシアン。実はおぬしに頼みがある」

「なんででしょう？　ご命令とあらば、大抵のことは」

一線を越えたことはあまりやりたくありませんが……、という意味です。

「我が軍事局が開発している魔法兵装の試運転をやってもらいたい。うちの研究者が連盟最強の座をほしいますまにしている蒼天の魔女が来たのであれば、是非に——とな」

「ふむ、危険なテストなのですか？」

「いや、腕は良い連中じゃ。第一、魔法少女のシールドを突破できるような事故を起こせるような兵装、作ろうとしても作れんわ」

「では私に確認を取るような話でもありますまい。中尉が問題なければ」

「僕はシアンくんがOKしたら、と言っただけどねえ」

「なら何の問題もありません。さっそく向かいますよう」

——というわけでさっそく軍事局にある広場へとやってきました。どうやら軍事局の敷地内のように、いくつかの自動車や二足歩行兵器などが置かれています。

私が案内された倉庫では——。

「あああああ貴方があの蒼天の魔女！　光栄です！　握手してください」

「やー」

「俺も！」「私も！」「どけ、俺が課長だぞ！」「バイタルデータ取らせてください！」

倉庫の中には白衣の老若男女が。

なにやら難しそうな機械をいじっていたのに、私を見た途端、わらわらと集まってきました。

なんなの、この人達……。

「毎日、毎日、魔法少女のために装備を作つとる連中じゃからなあ……」

「しかし……、何故私の存在を？」

魔法少女の詳細などマスコミにはほとんど明かされてないはずですが。

「おいおい、彼らは仮にも軍の研究員だよ？ キミのこれまでの戦歴や研究データ、その全てが彼らに流れていてもおかしくないのさ」

——と、中尉。なにやら自慢気です。

元は彼らと同じような研究畑の人だったのでしようか。

魔法少女好きのようですから、仮にそうだとしてみてもおかしくありません。

「ふむ。ではなぜ大佐は辛気臭い顔をしてたんですか？」

「ほら、こういう連中に体の隅々まで調べられるって、年頃の乙女的には嫌じゃろ」

「別に構いませんよ。単なる医療行為の延長でしょう？」

「わしは嫌じゃったの！」

そう言つて、地団駄を踏むセグイン大佐。

自分が嫌だったことを私にさせたくなかつたのでしようか。

大佐も元魔法少女のようですし、こういった実験がトラウマになつていてもおかしくありません。

「わしのシアンちゃんが薄汚い研究者共に隅々まで調べられるー!!」

「私が調べられるのが嫌だったんですか!？」

なんて人でしよう、まったく……。

「しかし……、私はどれをテストすればいいんですか？」

「ああ、もうすぐ上がってくるよ」

中尉がそう言うのと、地下からリフトに乗って機械がせり上がってきました。

その姿はまるでうずくまった白いドラゴンのようです。

全長としては私の二倍ぐらいでしょうか。

「烈龍。稼働テスト中の魔法兵装さ」

「こんなもんつけてどうするんです？」

「ははは……、君には不要かもしれないけれど、これがあれば活躍の幅が一気に伸びる魔法少女だっているだろう？ それに戦力の拡大は死傷率を下げることもつながる。決して無駄な研究じゃないさ」

「ではなぜ、私のデータが欲しいのでしょうか」

「何事もハイエンドのデータというのは参考になるからね。最大値を知っていれば、色々と参考にできることもあるってことさ」

「なるほど……、では装備してみますか」

「ではその物陰でこれを着てきてくれ。女性の研究員が装着を手伝ってくれる」

と言われてハンガーラックに掛けられたパイロットスーツとともに、簡素な試着室へと案内されました。カーテンで仕切つてあるだけのタイプです。

この手のは軍で活動した時、散々使っているので気にしません。

むしろ仕切つてあるだけマシなぐらいです。

パイロットスーツは、ぶかぶかなビッグサイズのようなのですが、なんとか肩まで被ると、一瞬でそれがゴムのように縮みました。

首まで全身黒タイツで、それに長い背骨が引つ付いてるようなデザインですね。

背骨は地面まで伸びており、刃のついた尻尾のような形状になっています。

そのまま、メカニクな龍の頭部を模したバイザーを被せられました。

視界の色が青く染まり、電子的な表記が広がります。そのまま口ポットアームによって手足に龍の四肢のようなマニピュレーターを装着されました。

通常の二倍以上は手足が増大しています。更には体を覆うような装甲とホバーを肩に装着し、諸々を合わせて完成のようです。

「……………重っ」

常に全体に飛翔魔法をかけていないと、どこか痛めてしまいそうですね……………。

「おおっ！」

「これは……………！」

「素晴らしいですね！」

「シアンさん！一旦飛んでみてくれませんか!？」

研究員達のテンションがめっちゃくちゃ上がっています。

ちよつと既に言いたいことがある感じですが、まあいいでしょう。

「中尉、飛んでみてもよろしいでしょうか？」

「ああ、既に許可はとってある。軍事局の周りを少しばかり回遊してみてくれ」

「では……………」

倉庫の扉が開けられたので、そこに向かって派手に飛び上がります。

やはり体がいつもより重い印象を受けます。

その分、肩部から外部に向かって羽のように伸びるホバーが、通常よりも数倍強力に感じます。

多少小回りはできなくなっても、速さはいつもより上かもしれない。

倉庫を飛び出ると、そこは青空。オベイロン軍事局はそれなりの高さのビルとなっていて、ココから見るとよくわかります。

屋上では、高そうな服を着た方々が歓談しながらこつちを見えています。

ふむ…………、どうやらVIPの方に向けたテスト飛行だったようです。

それならもう少しサーブスしてやりますか。

ホバーの出力を上昇させ、スピードをあげます。ある程度変則的な軌道を描きながら軍事局の周辺を回遊……………。まあ、この程度は一年のブランクがあっても簡単です。

しばらく飛んでいると――。

『シアンくん、もう十分だ。戻ってきてくれ』

中尉から通信連絡がありました。

「しかし中尉、装備されている火器を使用しておりませんが」

『ははは、こんな町中でぶっぱなせるわけないだろ?』

それもそうか……。言われたとおり、倉庫へと戻っていきます。

ロボットアームが複数ついたガレージによって、装備が外されると、ようやく烈龍を脱ぐことが出来ました。

脱いだ烈龍はそのまま地下へと収納されていきます。

「で、どうだった? 烈龍の使い心地は」

「はい、極めて個人的かつ、装備を使用していない限定的なテストでの感想でかまわないでしょうか?」

「もちろんさ」

「最悪でした」

できれば二度と着たくはありませんね。

■ ■ ■
「きやあああああああ!!」

セグイン大佐の声です。この人は常に叫ばないとダメなのでしょうか……。

私は今、化粧室でパーティ用のドレスに着替えていました。

トイレのことを化粧室と呼ぶ事があることは知っていますが、今回は本来の意味での化粧室。化粧やお着替えするための場所です。

着替えたドレスは青と黒を基調としたもの。

セグイン大佐がある程度動きやすく、品のいいものを選んでくれたのでした。

これと比べると中尉が選んだものはいささかメルヘンチックだっというか……。物語のお嬢様が着てそうなものでした。当然、私にそんな服は似合いません。

着付けもセグイン大佐が手伝ってくれて、順調に着ることが出来ました。

「やっぱりよく似合うわあ……。シアンちゃん……」

恍惚の表情を浮かべながら、こちらを見てくる大佐はやや怖いもの

があります。

大佐も普段の軍服ではなく、白いドレスを身に纏っていました。普段ポニーテールの金髪も、さらりとストレートに仕上げられています。

こういうところちゃんと大人だなあ……。表情以外。

「あの、大佐。またキャラが変わってないでしょうか」

「え？ ああ、ごめんなさい。私、今日はこれでいくわ。ほら、パーティでわしだのじやのじやのとか言ってもらえないからね、オホホホ」ちよつと人が変わったような高笑いをしています……。

大佐なりの処世術なのでしょう。気にしないことにしました。

「ところでパーティは、どのようなプログラムになっているのでしょうか」

「いつ歌うのか……。ということもありますし、色々立ち回りが変わってきます。」

「ふむ、基本的には立食パーティの予定よ。オープニングセレモニーをしたら、ひたすら立食形式で皆様ご歓談。いい感じに盛り上がってきたところで、シアンちゃんに歌ってもらおうかしらね。歌う曲、決まった？」

「それがまだ……」

セグイン大佐が歌詞の書かれたカードとデバイスを渡してきました。

「デバイスは小瓶のような細長い形状で、イヤホンがついてあります。」

「そんなことだろうと思って選んでおいたわ。一通り暗記したら、パーティ会場に入ってきたさい」

そう言っつて、ウイंकして大佐は部屋を出ていきました。オープニングセレモニーを始めるつもりなのでしょう。しかし本当にキャラが違いますね。ちよつと怖いな。

さて、デバイスで大佐の選んだ曲とやらを聞いてみましょう。

ふむふむ、なるほど。

どうやら『平和』というテーマを『爆弾』に交えて歌っている曲の

ようですね。

よし、時間もありませんし、さっそく歌詞を覚えるのでしょうか。

——といったところで。

突然、私の視界が白く染まりました。

.....

.....

.....

いえ、意識は失ってません。

私の周囲に魔法陣が展開されていました。自動的に発動したシールドによって爆風や閃光が防がれたようです。

まばゆい光も、実際はちよつとライトに照らされた程度の影響。

なるほど、文字通りの爆弾が化粧室のどこかに設置されていたようですね。

ですがその程度で、魔法少女は殺せません。

周りを伺うと、ひどい有様ですね。

窓側の壁など完全に吹き飛んでおり、大きな風穴が出来ていました。そこからオベイロンの夜の町並みが伺えるほどです。

誰がこんな事を。……などと言わなくてもわかりますか。

あれほどご丁寧に紹介してくれたんですから。セグイン大佐……。

軍の情報がどこから漏れていたのかと思っていました。が、何のことはない。

あの人が裏切り者だったということですか。

確かに元魔法少女ならば、魔法少女に同情するのはおかしくありません。

だからこそ裏で魔法少女と組んでいたのでしょうか。

一つ懸念があるとすれば、飛行機でのハイジャック犯達は私のことを知らなかったことです。

恐らく中尉から大佐に私のことは連絡が行っていたはずなのに……。

まあ、そんな事は置いておきましょう。

セグイン大佐がこの事件に関わっているのは確実なのですから。

……と、そんな折、プルプルプルと腰のベルトに引っ掛けておいた
ユーフォンがなりだしました。

どうやら中尉からの電話のようです。

右耳に装着。ショートカットボタンを押して……つと。

『シアンくん？ 無事だったのかい？ そちらで爆発があっただろ
う』

「ええ、セグイン大佐にしてやられました、なんとか無事です」

『彼女が？ ありえない……』

「ですが、そうとしか思えない行動でしたよ」

『もしかすると何者かに洗脳されているのかもしれない……』

「……なるほど。たしかに少し様子がおかしかったです」

『わし』とも『のじゃ』とも言わず、延々普通の口調で話してました
からね。

パーティのためだと言われて納得してましたが。

あれが洗脳の結果だとすればこの上なくわかりやすいです。

「それで中尉。わたしはどうすればいいでしょう」

『ああ、どうやらビル内には既にそこかしこに爆弾が仕掛けられてい
るらしい。テロリストどもがそう言っていた。セグインが洗脳さ
れているのなら、警備などなんとでもなるからね』

「困りましたね……。場所もわからないのに私一人で爆弾の解除など
出来ません」

『逆に場所さえわかれば、解除できるのかい？』

「ええ、まあ。シールドで囲んで破壊すればいいだけです」

シールドは非魔法攻撃に対して、とことん強いですからね。

魔法でないのならば、ある程度の爆発は無傷で済みます。

『つまり爆弾の場所を探せばいいわけだ』

「しかし……、どうやって？」

『まずは相手の目的から考えてみようか』

……と、言われましても。

まあ、目的は私ではないでしょう。私を殺し切るにはいささか準備不足です。

おそらくはVIPの方々……、いや連中が前々から狙っていたのがありましたね。

「私達が運んできたあの冷蔵庫。あれが目的なんじゃないですか？」

『……あまり考えたくはないけど、そうなんだろうね』

「あれには一体何が入ってるんですか？　連盟の新兵器？」

『いまさら隠しても仕方ないか……』

はあ、と電話越しに溜息をつく大佐。

『魔法少女さ。リリカ・プレガール。教えただろう？』

「魔法少女を……、冷蔵庫に!？」

『仕方ないだろう？　そうでもないと腐るからね』

「……遺体を保存してたんですか」

なんだろう、この人。筋金入りだな。そんなに幼馴染が好きなのか。

「しかし……、たかだか死体ですよ？　動くわけでもなしに」

『そうでもないさ。実は魔法少女の死体からは生前ほどではないが、魔力を産出されることが研究でわかっている。おっと、緊急時とはいえ一般回線で言うことではないね』

「後で買収でも隠蔽でもなんでもすればいいでしょう」

どうせ魔法少女に渡すような携帯です。

ある程度そういう事をしやすい細工がなされているに決まっています。

「……で、それをこの軍事局で研究していたと？」

『ああ、魔鉱石に変わる環境問題を解決するエネルギーとしてね』

「魔法少女の人権問題をまず解決していただきたい」

『どうせ死体さ。上の連中はなんとも思っちゃいない。とはいえ……リリカはキミと同じSランク。元操縦者^{ドライバー}だった僕が死体を管理していたこともあって、首都に置かれていたってわけさ』

「Sランクの死体はそれほど欲しくなるものなんですか？」

『いや……、そんなことはないはずだ。いくら魔力を産出すると言っ

ても生存しているCランクにも及ばない。ただ……」
「ただ？」

そう言うと、しばらく中尉が黙りました。
なにか考え事をしているのでしょうか。

『いや……、仮説の域を出ない。大事なのは彼らの狙いがリリカの死体ってことだけさ』

「はあ……」

何かを隠しているのかのような口ぶり。いや本当に仮説の域を出ないだけなのかも。

「とにかく、彼らは地下に向かっていているわけですね」

『ああ。エレベーターに対して、特殊な操作をすれば地下に行くことが出来るんだけど……、それには生体認証を行う必要があるんだ』
「生体認証……」

つまり特定人物の指紋とか静脈とか、虹彩とかを認識しなければ地下に降りることは出来ないということです。当然、私は登録されていないでしょう。

登録されている人物を探すしかないですが……。

『僕が登録されている。迎えに来てくれ』

「中尉はどこに？」

『……パーティ会場で魔女宗マレフィキウムに人質にされてる。人が多いからこうしてヒソヒソ話せるけど』

「その眼鏡、持っていてよかったですね」

とりあえずは方針が決まりましたね。しかし懸念することがあります。

「私が爆破されてからエレベーターに向かったとなると間に合わないのでは……？」

『少なくとも安全に運び出すためには数十分は時間が必要なはずだよ。それなりの準備がいるからね。そんなすぐには逃げ出せないさ』
「それまでは軍事局も爆破されませんか」

『ああ。地下に生き埋め……、ならぬ埋葬されちゃうからね。それまでにVIP達を避難させ、動かせるようにした兵たちに爆弾の搜索と

処理を任せつつ、洗脳されたセグイン大佐を止めるため地下に向かう。爆弾の所在は捕らえたテロリストか、あるいはセグイン大佐からでも聞き出せばいい。どちらもダメだったとしてもVIP達は助かる』

「了解しました」

まずは中尉の救出ですね。魔法少女でない相手なら何人いようと同じことです。

パーティ会場は確か最上階にあったはず。早速向かうとしましょう。

廊下に出て、走っていきます。私が今までいた部屋は最上階。

つまりはすぐそこというわけです。

……と、会場の入口まで走ってきたところで、嫌なものを見ました。

「よお、曹長オ」

「エーラ・ヴィヴァーチェ……。生きていたのですか」

いつぞやの右半身メタリック眼帯ゴシック緑黒髪女が扉の前に立っていました。

しかも今回は……。黒い大鎌を肩に背負っています。

なんだか妙な魔力を感じますね。俗に言うアーティファクトというやつでしょうか。

アーティファクトは魔法少女に強力かつ特殊な魔法をかけられた物品のことです。

長い年月をかけて魔力を籠めれば、その分長く使うことも出来ません。

「あのお方に助けてもらったんでねエ！ アンタこそあの爆発でよく生きてたな？」

「あの程度の爆発で死ぬ魔法少女とかいるんですか？」

「大抵の魔法少女は不意を打たれたら死ぬと思うんだけどオ？」

「シールドを自動化出来ない雑魚ってことですか？ ああ……。あなたもでしたね」

「……言うじゃねえか。決着をつけようぜ！ ついてこい！」

あ、パーティ会場へと入っていききました。侵入者を前にして、なん

だかシールドですね。

向こうも人質を持っているわけですから、余裕なのでしょう。か。罾かもしれないが……、迷ってる時間ありませんね。

私も扉を開けて、奥へと入りました。そこはパーティ会場。広々とした空間です。

天井にはシャンデリア、三方には銃を突きつけられた人質達。

豪華な服を来た老若男女達です。

もちろんその中には中尉もいます。その上、有刺鉄線が出入り口を除いた三方に張り巡らされています。

それに驚いていると、入ってきた扉まで有刺鉄線でグルグル巻きにされました。

頑張つて働いてますね、ガスマスクさん達。

「こんなところに呼び込んでどうするつもりですか？」

「へっへっへ、この中なら魔力弾は撃てねえ。人質に当たるからな。飛ばうにもたかが知れてる。つまり——接近戦しか出来ねえ空間なのよ」

「ほう、接近戦なら私に勝てるだけでも？」

「普通は勝てねえわな。だからこいつをあのお方に貰ったのさー！」

ブウン！ と大鎌を振るうエーラ。

やはりなにかしらの魔法がかけられているのでしょうか。

あれは避けたほうが良さそうですね。

『シアンくん、あの黒曜石の大鎌……。おそらく“魔女殺し”の作ったアーティファクトだ！ 極端に魔法が効きづらい！ 気をつけろ！』

なるほどね。シールドも魔法ですし、それならば私のシールドも貫通することが出来ます。

接近戦に加えて、シールド破りの大鎌があれば勝てるということですか。

確かに接近戦はそれほど卓越しているわけではありませんが……。

まあ、やってみなければわかりませんよね。

「いいでしょう。かかってきなさい」

「んじや、始めんぜエ!!」

大鎌を銀の義手で振るうエーラ。

あんな大物を片手で振れるのは強力ですね。

ですが、かなりの大ぶりです。当然大鎌の扱いなど、エーラが知る訳ありません。

よほどのことがない限り、当たらないでしょう。

私は難なくそれを避け、懐に潜り込みましたが……。

エーラは左手に緑色の光刃を作り出し、斬りかかっていました。

なるほど、大鎌とライトブレードの二刀流というわけですか。

私もすかさず青色の光刃を右手に発生させ、それを防ぎます。

ですが、そんな事をしている間に大鎌が再度振られ、一瞬の隙が無くなつてしまいました。

横薙ぎに払われる斬撃を軽く飛翔魔法を発動して、ジャンプで避ける。

そのまま部屋の中央へと、トントントンと飛び跳ねます。

「ふむ……。どオだよ。どうやらアンタでも一筋縄でいかなそオだが？」

大鎌をくるりと回して、にやつくエーラ。

「ええ、なかなか厄介ですね」

再び、エーラがこちらに走り出してきました。

大鎌、ライトブレード、大鎌、ライトブレード。

一つ一つを避け、弾くことは出来ませんが決め手には欠けています。

というよりこちらから攻撃できる隙がありません。

さてどうするか……。

こちらもライトブレード二刀流で行ってみますか。

両手に魔力を込めると、それを察知したのかエーラがくるくると大鎌を回しました。

左腕のライトブレードで防ぎましたが——、こっちのほう霧散する始末。

やはりあの太鎌には魔法は通じないようですね。ですが、当たったのは柄の部分。

そのまま左腕でガードしましたが……。よほど、義手の性能がいいのでしよう。

そのまま弾き飛ばされました。……折れてますね。左腕。

この世に怪我や病気を根本から治癒する魔法などありません。

ただ、骨折程度ならば魔力で骨をつなぎ合わせる事ができます。

神経、血管も同じ調子でカバー。ある程度の痛みや腫れは、神経の酩酊を限定的に行い、無視することにします。

後は自然治癒力を魔力で強化しておけば、一〜二週間で治るでしょう。

常人からすればぐしゃつとL字型に折れた左腕が逆再生するかのようには治る光景でしょう。

「へっへっへ……、私が優勢みたいだな」

「別にこの程度。ダメージでもありませんよ」

……とはいえ、次はこれで済むとは限りません。ライトソード二刀流はこれでは心許ありませんし……。

ああ、そうだ。『間合い』というやつ。試してみるとしましょうか。『戦国シルヴァ』でやっていたやつです。

構築魔法で刀を鞘とベルトごと形成——。右手で抜けるように構えます。

デザインはやや機械的になりましたが、まあ悪くはないでしょう。

「なんの真似だア？ 言っておいてやるが、構築魔法で作られた形成物だって、この大鎌は安々と切り裂けるんだぜ？」

エーラが訝しげな表情でこちらを睨んでいます。

「でしようね。魔力によって作られていますから」

「へっ、万策尽きたか？ 別に今から降伏すなら仲間に入れてやってもいいんだぜ？」

「余計な世話——。かかってくるなさい」

「だったらア……遠慮なくツツ！」

こちらに向かって駆け出してきたエーラ。

相変わらず大鎌は大振りですが、しっかりと片手のライトブレードで防御しています。

ですが、関係ありません。

私はエーラが近づいてくるはるか前で刀を引き抜きました。

「んなア……!?!」

「例えどんな切れ味を持つ刀剣でも、流水は斬れない。でしよう?」

「テメエ……! 剣のフリした魔力弾かよ……ッ」

そのとおり。腰に挿していたのは刀剣ではなく、ただの発射装置。引き抜けば三方の端にいるVIPに当たらない程度の範囲に——。いや当たったとしても気絶程度で済むほどの魔力弾。

否、魔力ビームを撃ち放つことができます。

ライトブレードや大鎌ではビームまでは完全に防ぐことが出来ない。

そしてエーラは自動でシールドを展開できません。

つまりこうした不意打ちに弱く——。

第二次魔法少女大戦でも、それが原因で右半身を失ったわけです。

改善するならまずそちらから改善すべきでしたね。

流石に命を奪う気はなかったので、低出力でしたが……。もし自動防御を覚えていれば、私が負けてました。

前向きに倒れ付すエーラ。一応本当に気絶しているか、蹴っておきます。

反応はない。どうやらちゃんと気絶しているようですね。

それから大鎌を回収……。重い……!

魔法も効かないんじゃない、これはちよつと私では使えなさそうですね。

左腕も折れてますし、置いていきましよう。

「動くな、女。VIP共がどうなつてもいいのか?」

おっと、戦いを見ていたガスマスク達が人質や私に銃身を向けているようです。

しのごのむの……、全部で七人か。誰からも魔力は感じられません。

もちろんプロテクトを施して、魔力を隠している可能性もあります
が……。

そこまでのことが出来る魔法少女がいれば、今の戦いに加勢していれば確実に私を倒せていたでしょう。

つまりほぼありえないと考えていいと思われれます。

だったらただの木偶の坊。七人全てを予めターゲットイングしておいて……つと。

「はいはい、降伏しますよ。両手を掲げておけばいいですか？」

「へっ、ものわかりがいいな。おい……、ロープでしぼれ」

ガスマスクの一人が寄ってきたところで、掲げていた両手から魔力弾を連射しました。

いわゆるホーミング弾。……といえば、聞こえはいいですが、事前にルートを計算し、叩き込む必要がある使い勝手の悪い技です。

全然ホーミング弾じゃないけど、名義上ホーミング弾。

狙い通り、彼らは銃を撃つまもなくホーミング弾にぶち当たり、気絶していききました。

さて、これでVIPの安全は確保しました。

「よくやった、シアンくん。……腕は大丈夫かい？」

「これぐらいなら継戦可能な範囲です」

人質の中から、有刺鉄線をかき分けて中尉が出てきました。

今まで隠れてたんですね……。まあいいでしょう。

「どうします？ VIP達は」

「僕以外にも軍人はいる。構築魔法で彼らに装備を作ってやってくれ」

「わかりました。戦える人達は前に出てください」

ぞろぞろと出てきた人達にガスマスク達と同じ装備に加え、拳銃を構築しました。

どれも非殺傷の物です。非魔法少女ならばこれでも十分ですし、魔法少女にあえばどのみち何を渡しても、彼らでは対処出来ないでしょう。

「では彼らを階段まで送りがたら、エレベーターで地下に向かおう」

「彼らはエレベーターに載せないんですか？」

「……………重量オーバーになる」

中尉にも構築した拳銃を渡し、廊下へと飛び出す私達。

しかし最上階にはもう敵は居ないようで、らくらくとエレベーターまで向かうことが出来ました。

「よし、君達は階段で安全に避難してくれ。僕達はこの事件の黒幕を捕らえに行く。それから爆弾解体班を用意しておいてくれ」

「わかりました！ 皆さん、ついてきてください」

大人たちがVIP達を連れて、階段を降りていきます。

まあ……、万が一エレベーターが止まっても、私と中尉だけならなんとでもなりますが、大量のVIPを抱えてとなるとそうもいきませんからね……。

エレベーターに乗ると、中尉が操作パネルの下部をおもむろに開きました。

そこには色々な機械が。中尉はその機械を覗き込んだり、指を当てたり、ツインテールレディ☆マジカルひなみんの変身呪文を唱えたりしています。

するとエレベーターが動き出しました。

「……………今のなんですか？」

「生体認証さ」

キマったな——というような顔をする中尉。いいえ何もキマってません。

おまえ一生、ツインテールレディ☆マジカルひなみんと付き合っていく気か。

しばらくエレベーターが降下すると、やがて扉が開きました。

そこは研究施設。様々な機械が置いてあり、さらに地下に吹き抜けるエリアがあるようです。

そのエリアにはセグイン大佐と——、いくつもの培養槽がありました。

いくつもの培養槽には何人もの魔法少女が裸で浮かんでいます。

「……………っ！ 中尉、あれは？」

「言っただろ？ 魔力を抽出するための魔法少女の死体だって。大丈夫、皆死んでるよ」

「なにが大丈夫なのよ、クズ」

おっと、セグイン大佐がこちらに歩いてきました。

「連盟の体制には呆れていたけれど、さすがにこれは失望したわ。それを良しとしているパスカル。アンタにもね」

「セグインじゃないな。その口ぶり。まさか……」

「御名答。私、リリカよ。リリカ・プレガーレ」

「どういうことだ……!?!」

思わず地下エリアに向かって、フェンスから身を乗り出す中尉。

洗脳されたはずのセグイン大佐は不敵な笑みを浮かべています。

「固有魔法。一部の魔法少女にはその個体しか有しない特殊な魔法を持つ」

「それがどうしたんだ」

「私の固有魔法は憑依魔法——。つまり魂を色んなものに憑依させることが出来るのよ」

なるほど……。今、セグイン大佐に取り憑いているというわけですか。

「飛行機でドクロマスクを操っていた魔法少女はあなただったというわけですね」

「そういうこと。気絶したエーラに憑依して、救助したりもしたわ」

「しかしそれなら疑問があります。何故私のことを知らなかったんですか?」

強力な憑依能力があるのなら、情報だって抜き放題のはずです。

「単なるタイミング——。アナタに接触できたのは飛行機内が初めてだったし、アナタが独房から出たことだって一部の上官以外知らなかった。たった数日よ? 私だって常にパスカルの周りをうろついているわけじゃない」

確かに、私の戦術的価値を考えると、独房から出てきたなどという情報は本来なるべく隠蔽しておきたいものですからね。出てきて数日前後ならば知らなくてもおかしくないでしょう。

「それに……、私以外の魔法少女の操縦者ドライバーになるなんて思ってなかった。パスカル……、パスカル・テルミドール!! 私を殺したくせに!」

「そうなんですか、中尉」

中尉の方を向くと、沈痛な面持ちをしていました。

「どうやら身に覚えがあるようです。」

「第一大戦末期だ。魔法少女の人権は今よりも軽視されており、魔法少女を色々な意味で虐待するような操縦者も少なくなかった。それに激怒したりリリカは……、多くの上官を始末した。Sランクだった彼女を殺せるのは僕しかいなかった。信用されていた僕がね」「……一体どうやって殺したんですか？」

「毒殺よー」

セグイン大佐が憤怒の表情を見せています。

いや……、あれはセグイン大佐ではなく中にいるリリカさんの感情なのでしよう。

そして毒殺とは、私も中尉に拾われていなければそうになっていたはずの死因です。

「でも死んだはずの私には意識があった。その時、憑依魔法に目覚めたのよ。すぐにでも復讐してやりたかったけど、私の死体は首都イグニスの研究所に保管された。体は動かないし、なんとかして

脱出する必要があった。そこで私は逆に考えたのよ」

セグイン大佐がくつくつと笑います。

その表情にはどこか危うげなものが見え隠れしていました。

「私の仕業とわからない限りここなら肉体を安全に保管しつつ、暗躍出来るってね!! そうして生み出したのが魔女宗よ!! 連盟を崩壊させるために!!」

中尉を見ると、非常にショックを受けた顔をしていました。

「大変だったわ。怒りを有する魔法少女、あるいは元魔法少女にしか取り憑けないんだから」

「リリカ! キミが魔女宗を作ったのか!? 魔法少女は光だと言っていたキミが……!!」

「光は光でも——破滅の光よ。それを今から証明してやるわ」

そう言うと、セグイン大佐がその場に倒れ伏しました。

その上に赤いもやが広がっていきます。

あれは……魔法を行使した時に出る魔力の粒子です。薄いので、魔法少女以外のものにはわからないかもしれません。

「シアン・ウエルテクス！ 私がアンタに取り憑けば真正銘最強の魔法少女が生まれるのよ！ それで連盟を蹂躪してやるわ！」

赤い靄が私に襲いかかってきました。——が、特に何も効果はないようです。

乗っ取られた感じもいたしません。

「……!? アナタ、この光景を見ても何も感じないの……!?」

「え、別に死体を再利用しているだけでしよう……?」

そりゃあ、生きてる魔法少女にこんな扱いをしているのであれば、多少の怒りを覚えるかもしれませんが……。

すでに死んだ人間を世間に役立てるなんて、魔法少女でなくてもやっていることです。なんでそれで怒るんだろう。

「この……っ、人でなし！」

「人に取り憑こうとする亡霊に言われたくありませんね」

さて、どうすればこの亡霊を消しされるんでしょうかね。

そう考えていると、中尉が私の肩を叩きました。苦悩の表情です。

「シアンくん、彼女の遺体を完全に消し去るんだ。そうすれば残滓である憑依魔法も消える」

「中尉……」

「パスカル……！ アナタという人は……！」

「僕はね、もう選んだんだよ。リリカ」

「いいわ、アナタごと消し去ってあげる！ この街をね！」

リリカさんがそう叫ぶと、左側から蛇腹剣らしきものが飛んできました。

とっさに私の周りに魔法陣が展開され、それを防ぎます。自動化したシールドですね。

左側を向くと、見覚えのある兵器がこちらへと飛んできていました。

魔法兵装、烈龍——！

烈龍は床を破壊し、リリカさんのいる地下エリアまで落ちていきま

した。

烈竜の尻尾……、否、先程飛んできた蛇腹剣が培養槽を破壊して、リカさんを外へと引きずり出しました。そのままリカさんを内部へと収納していきます。

それを黙ってみている私ではありません。

今のうちに変身、もとい武装することになりました。

「構築魔法、展開!!」

シールドドレス構築完了。腰部ホバー構築完了。

リリカルマジカルアンチマテリアルライフル構成完了。

構築されたライフルで烈龍を撃ちますが、赤い魔法陣によって防がれました。

「無駄よ、同じSランク。半端な攻撃じゃお互い届かない!」

烈龍から無数の蛇腹剣——いや、もはや触手と形容すべきものが周囲の培養槽を次々と破壊し、中にいる魔法少女達を取り込んでいきます。

烈龍の背骨を伝って、魔法少女の死体が連なっているその様はまさに死体の山……、いえ死体の龍といったところでしょうか。

「そして死体の分、私が有利。——始めましょうか」

巨大化した蛇腹剣の一振りが、実験エリアを破壊しながら私達へと向かってきます。

とっさに中尉をしゃがませて、回避。

「どうします、中尉」

「なんとかしてくれ……!」

「始末していいのですか?」

あえて言わなかった言葉は。

彼女はあなたの部下で、幼馴染で、恋人で、相棒だったのでしよう。

それを始末していいのですか、と。

「その質問なら十数年前にやってくれ!」

立ち上がり、私の方を向き直る中尉。

その表情は激痛でも感じているかのように歪んでいます。

「操縦者として命じる！ シアン・ウエルテクス曹長！ リリカを止めてください……！」

「……わかりました」

「魔法少女は人を傷つける道具じゃない。光なんだ……！」

「まだそんな戯言を！」

リリカさんのそんな台詞とともに、私は烈龍の腕に掴まれました。そのままエレベーターへと突っ込んでいき、展開されるシールドによって天井が破壊。

エレベーターシャフトの中を上方向に引きずられている形です。

「あははははッ!! アンタもいつ裏切られるかわかんないんだよ!? うちに来なよ! 魔女宗にさア!!」

マレフィキウム

「一つ——勘違いしていると思います」

「なに……?」

「私、けっこう気に入ってるんですよ。中尉の戯言」

右腕からライトブレードを撃ち出し、烈龍の右腕を破断。

シールドでダメージはほぼなかったですが、けっこう苦しかったです。

本来ならシールドが弾くのですが、お互いSランク。

シールド同士が妙な干渉を起こして、完璧には防げないようです。

だが、それは向こうも同じこと。

攻撃された時に落としたライフルを再び構築し、撃ち出します。

「いけえ!!」

しかしホバーがある分、向こうのほうが早いのでしょう。上空へと逃げられました。

幸いにも魔法少女によって巨大化した尻尾を破壊することには成功しましたが——。

落ちていく魔法少女達の死体。せめて安らかに眠ってください。

「私の同胞達が……！」

嘆くようなリリカさんの悲鳴が聞こえます。頭に直接響く感じで嫌ですね……。

ただの通信魔法じゃない。魂の叫び——そう形容すべきでしょうか。

烈龍を追って、飛んでいると上からシャワーのように赤い魔力弾が撃ち放たれます。

私のシールドがそれを弾きます。エレベーターシャフトを赤い閃光が照らしました。

なかなか厄介ですね……。無傷ですが。

連戦でそれなりにこちらも消耗していますし、さっさと決めますか。

エレベーターシャフト内であるならば、どんなに射撃が下手でもエレベーターシャフトギリギリ限界の幅の魔力弾を避けることは出来ません。

「喰らいなさい——!!」

ライフルの引き金を引き、放たれる魔力弾。

ごん太ビームと仲間内で称されていたそれは、見事に烈龍にぶち当たりましたが——。

相手もやり手。魔法陣を三重に展開して、それを防ぎました。

「アハハハハッ!! 楽しい! 楽しいわね! シアン・ウエルテクス!」

それだけではありません。ちょうどエレベーターシャフトは最上階へと到着し、そのままぶちぬいて屋上を超えて、空へと飛び上がったのです。

私も追隨して空へ。嫌ですね……。このまま空中戦になると、こちらが相当不利です。

なにせ私は射撃がそれほどうまくありませんからね。ええ。

ですが、烈龍は上空に登ると、そこで停止してしまいました。

「アナタには魔法少女の魂の悲鳴が聞こえないの?」

「聞こえませんが……」

「私にはわかる。今、多くの魔法少女達の魂がこの空の上を渦巻いている」

言われて空を見上げますが、ただの夜空です。亡霊など何も飛んで

いません。

「魔女の祭り——真の意味でのワルプルギスのようにね」

両手を頭上に掲げる烈龍。その片方は私によって破壊されています。

「ずいぶんスピリチュアルな事を言うのですね」

「そう。私には使命があるの。全ての魔法少女を不自由から解放する。もちろんアナタもね」

「それはご丁寧にどうも」

具体的に不自由とは何のことでしょうか。国から人権を取り上げられてることかな。

まあ、それはそうですが……。

「だから、この町ごとアナタを縛るものを破壊してあげるッ!!」

「それはちよつと感心しませんね」

烈龍の両手に赤い球体が作られ始めました。あれは——仕掛けてきます。

魔力弾を数発放ちますが、赤い魔法陣に防がれ、まるで通じません。

コスト度外視で防御に徹しているのでしよう。あれが決まれば終わりだから。

だったら……、私も本気で挑みます！

「刮目しなさい。スカーレットレイン!!」

魔法名をわざわざ口にする必要はないので、今は趣味なのでしよう。

しかし、口にしたただけはあって、とんでもなさそうな威力です。

赤い球体から放たれた無数のビームが、雨のように地上へと降り注がんとしているのですから。

一発一発は私を到底殺しきれない一撃でしょう。

ですが、下の街——オベイロンは違います。

あれだけの魔力弾が直撃したらあとに残るのは廃墟のみです。

私はスカーレットレインの範囲内に大きな魔法陣を展開しました。ガガガガガガッ、と魔法陣が削られていくのを実感できます。

「あははは！ 健気なものね！ でもそこまでシールドを広げてどれ

だけ耐えられるのかしら？ 見ものだわ！」

「シールド？ これはシールドではありません。射出口です」

「……………なに？」

魔法陣から離れ、さらに数段魔法陣を展開します。

私に近づくにつれて小さくなつていく魔法陣です。

「私はSランク。都市一つ一撃で破壊する蒼天の魔女ですよ。その一撃、見せてあげましょう。そうですね、あえて名前をつけるならば……………」

少し迷いましたが、まあいいでしょう。

ツインテールレディ☆マジカルひなみんの変身呪文にしておきます。

「イルミネイト！」

ライフルから撃ち放たれたビームは次第に大きくなっていき、やがてと自然体を覆い尽くすような超巨大な規模の太さになりました。

まるで光る大木です。

「あ、ああ!! あああ……………」

当然、そんなものに巻き込まれて無事なわけがなく、烈龍——そしてリリカさんが崩壊していきます。可哀想ですが、これは一度撃てばもう最後まで止められません。

「パスカル……………」

リリカさんが消滅する瞬間、一つのイメージが飛んできました。

……………。

……………。

……………。

草原で走る子どもたち。幼少のセグイン大佐に、中尉に、そして——リリカさん。

『リリカはさ。魔法少女に生まれちゃったこと後悔してないの？』

『全然！ だって私、魔法少女って人々を傷つける道具じゃないと思うの』

『つまり……?』

『笑わないでね。魔法少女の本質って光だと思いの。人々を照らす光』

これはリリカさんの記憶でしょうか。一体何の通りで――。

いえ、リリカさんの憑依魔法が超極大の魔力を浴びて暴走しているのかもしれない。

『だから私、頑張って魔法少女の力で皆を笑顔にしたいんだ』

『ああ、それはとっても素敵な夢だね。本当に素敵だ――』

……。

……。

……。

そんな子供時代の中尉の言葉が響きながら、イメージは消滅しました。

さて……、流石に厳しいですね。あれだけの魔力を放てば、もう回復するまでシールドも使えません。

飛翔魔法だって同じことです。すぐさま地上に降りましょう。

そう思い、地上に向かってしていると――、ちょうど軍事局から中尉が出てきました。

とりあえず意識を失う前に中尉に保護してもらおうとしますか。

「シアンくん、……リリカを倒したのかい」

フラフラと地面に降り立った私の方を右肩を掴みながら、中尉が聞いてきました。

「ええ、恐らくもう跡形もありませんよ。残念でしたね」

「この空を見ればわかるよ」

「空……?」

中尉が見上げている先を見ると……。

空が魔力の粒子で青く光り輝いています。

「これが君の呼び名だよ、蒼天の魔女」

空などずいぶん見上げたことがありませんでしたから、わからなかったです。

それを眺めていると、中尉がぼろりと一筋涙を流しました。

「どうしました、中尉」

「……………初恋だったのさ」

「初恋は叶わないものですよ」

「かもしれないね」

眼鏡をずらし、涙を拭う中尉。

それから何か覚悟を決めた表情で宣言しました。

「シアンくん、やっぱり僕は魔法少女の光を信じるよ」

「では私も一言…………」

出会った頃から感じていた思いを、今こそ吐露します。

「私はアイドルより魔法少女のほうが向いていると思います」

■ ■ ■

タニタ・セグインの執務室は風情がある書斎という感じだ。

僕はそのテーブルに座り、今回の件の報告を聞いていた。

「今回は魔女宗マレフィキウムが全て悪いということで、リリカくん辺りの情報はも

み消しておいたぞい」

そう言つてセグインが僕に書類を渡した。

その書類に目を通しながら、僕達は話を続ける。

「自分のスキャンダルになるからだろ」

「ははは！ そうともいう。すまんかったな！」

カラカラと笑うセグイン。彼女のそういうところに救われている節はあるのだが、今回限りはごまかさず聞きたいことがいくつあった。た。

「なぜリリカは自分で脱出しようと思わなかったんだ？ 普段なら凍結されているから動けないだろうが…………、あの時は培養槽に入っていたし」

「ああ、恐らく烈龍だけでは軍事局の防衛ラインを突破できんと考えたんじやろうな。実際何かしらの問題があった時、あの区画は封鎖され。水没するように出来ていたんじや。儂が操られたり、軍事局のコ

ントロールが麻痺でもせんかぎりはな」

用心してセグインに取り憑いた故に、外部から介入する作戦を展開するに至ったのか。

「それとわざわざシアンに地下の光景を見せていたあたり、シアンを乗っ取るつもりだったんじゃないやろうな。すでに生命活動が止まっている肉体を無理やり動かすより、そっちのほうが強い」

「だとすると、エーラ・ヴィヴァーチェとの戦闘は？」

「もちろんあれで始末できれば良し。できなければ——と二重の作戦じやろうよ。つまりもつとも用意周到な安全策をとったというわけじゃな」

慎重派のリリカらしい手だ。さて聞きたいことはもう一つある。

「セグイン……。リリカは怒りを持っていて魔法少女、あるいはそうだった者にしか取り憑けないと言っていた。キミの怒りとはなんだったんだ？」

「……………おぬしがいまだにリリカの面影を追ってたことじゃ」

顔を赤らめて、顔を逸らすセグイン。そんなことを反逆一步間近の事件に発展しないでほしいんだが、心というのは他者が犯さざる聖域だ。日々のストレスからイラついてた——なんてくだらない理由だったとしてもこの際仕方ないのだ。

「別に面影を追ってなんて……。まさかシアンのことか？」

「そーじゃ！ あんな瓜二つの娘を連れてきて！ 未練があつたとか思えん!!」

ビシリ、とこちらを指差してくるセグイン。そんなこと言われてもだな……。はあ……。

「シアンくんはリリカの妹だ」

「……………なに？」

「リリカが亡くなったことで、両親は離婚。十数年経って母親が産んだのがシアンくんなのさ。もつとも……。父親は誰かわかっていないだけだね。だから孤児院に入れられた」

セグインの眉が露骨に下がる。あれはテンションの下がっているときの顔だ。

「その話……、シアンは知っているのか？」

「教えるわけ無いだろう。知る必要もない」

「だから回収したと……」

「姉と同じように味方に毒殺されるなんて聞いた時、僕には耐えられなかった。だから助けた。決してシアンくんをリリカと同じようにはさせない」

「じゃが……、もしもシアンの奴が暴走すれば、犠牲は今回の比ではないぞ？ わかっているんじゃない？」

「その時は僕の首でもなんでも上層部にくれてやるさ」

「はあ……、おぬしというやつは……」

そう言つて、セグインが頭を抱えた。僕からすれば当然の話だと思ふんのだが……。

ドライバー
操縦者として二回目の失敗をし、多くの犠牲を出したとあれば、死刑ぐらい当然のことだろう。もちろん、そうならないように立ち回らつてもりだ。

やがてセグインがもじもじとしながら、なにか言い出した。

「な、なあ、パスカル。おぬしの手伝いをわしにさせてもらえんじやろうか？」

「え？ 手伝いなら既にもらつてるじゃないか」

「そ、そーじゃなくてだな……、その……、わしと一緒に家庭を持たんか!? シアンも家庭があつたほうが安心できると思うんじゃない」

顔を真っ赤にしてそう言うセグイン。いや、えつとうん……。

薄々そんな目で見られていたことには気づいていたけど。

「セグイン、家庭というのはいささか早計だと思うんだ。お互いの実家もあるし、なによりシアンくんがどう反応するのかわからない」

「そ、そうじゃな！ それで……？」

「とりあえず……、プラトニツクなお付き合いから初めてみるのはどうだろうか？」

別にセグインのことは嫌いじゃないし、美人だと思っている。嫌いか好きかで言えば、間違いなく好きな部類だ。つまり断るほどの意見を持つていないのだ。

健全なお付き合いから始めて様子を見てみるしか無いと思う。

「そ、そ、そうじゃな！ よろしく、パスカル……！」

「(ちら(そ)」

によよと微笑んでいるセグイン。

まあ——、彼女の笑顔も守りたいと思っっているのは確かなのだ。

そうは言っても、僕達の勤務先は違う。

セグインなど軍事局局長だ。そう簡単に転勤は出来ないだろう。

遠距離恋愛になると思うが——、それぐらいが僕らには丁度いいだろう。

ちようど携帯なんて便利なものもあるしね。

セグインと一通り話すと、僕とシアンくんは空港へと歩いていくことになった。

車で送ってもらう手はずだったのだが、ちよつと歩きたいとシアンくんが言ったため、徒歩に代わったのだ。

オベイロンの町並みは相変わらず美しい。今回の件で環境問題の解決は当分遠のくだろうが、ぜひ魔法少女以外の方法で解決してもらいたいものだ。

「しかしシアンくん、なんで急に歩きたいなんて言ったんだい？」

「やはり自分で守った街並みを確かめたかったですからね」

いつもどおりの透き通るような声。どこ吹く風の無表情。いったい何を考えているのかちよつとわからない、難しい子だ。リリカに似ているその面影は、僕に庇護欲と哀愁を感じさせる。

……仕方なかったこととは言え、姉を撃ち殺させる羽目になってしまったのだ。

この秘密は当然僕が墓穴まで持っていくつもりだが。

「それでえーつと……、アイドルよりも魔法少女っていうのは」

「ええ、私。魔法少女としての力を使って、人々を笑顔にしていきたいんです」

ギョツとした。まるでリリカが言っているかのようだ。まさか

……取り憑かれているんじゃない。

「……なんですか？ 取り憑かれているとでも思ったんですか？ お

生憎様です。そんなことは微塵もありませんよ」

「じゃあなんで……」

シアンくんがふふん、と微笑んだ。

「あなたと彼女の絆が羨ましかったからです」

「絆……？」

「ええ、魔法少女の光で繋がる絆。それってとっても素敵じゃないですか？」

幼少のリリカを思い出すような、そんな笑顔に。

僕はこう言うしかなかった。

「ああ、それはとっても素敵な夢だね」